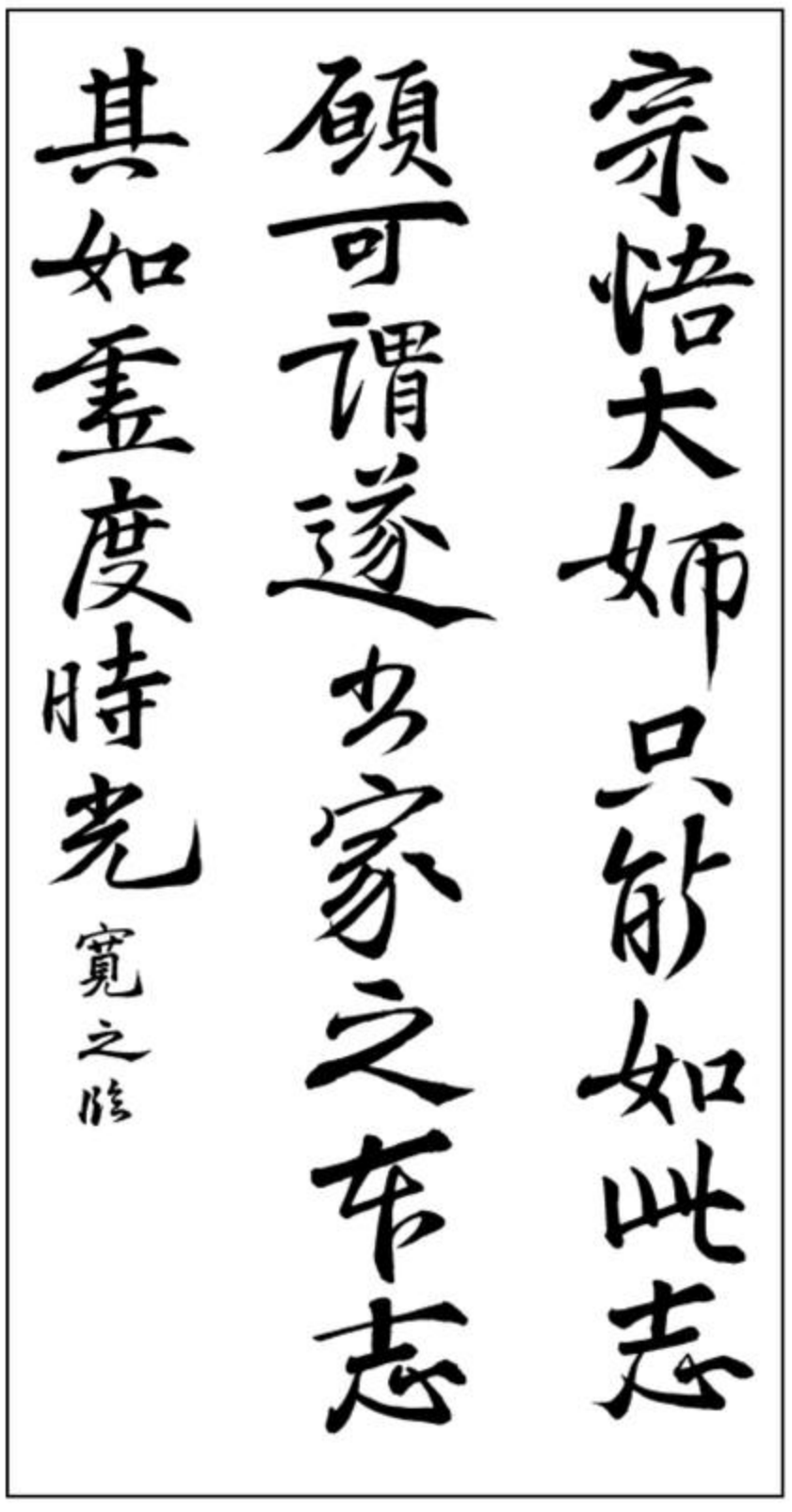
◆作品紹介　―西来院―

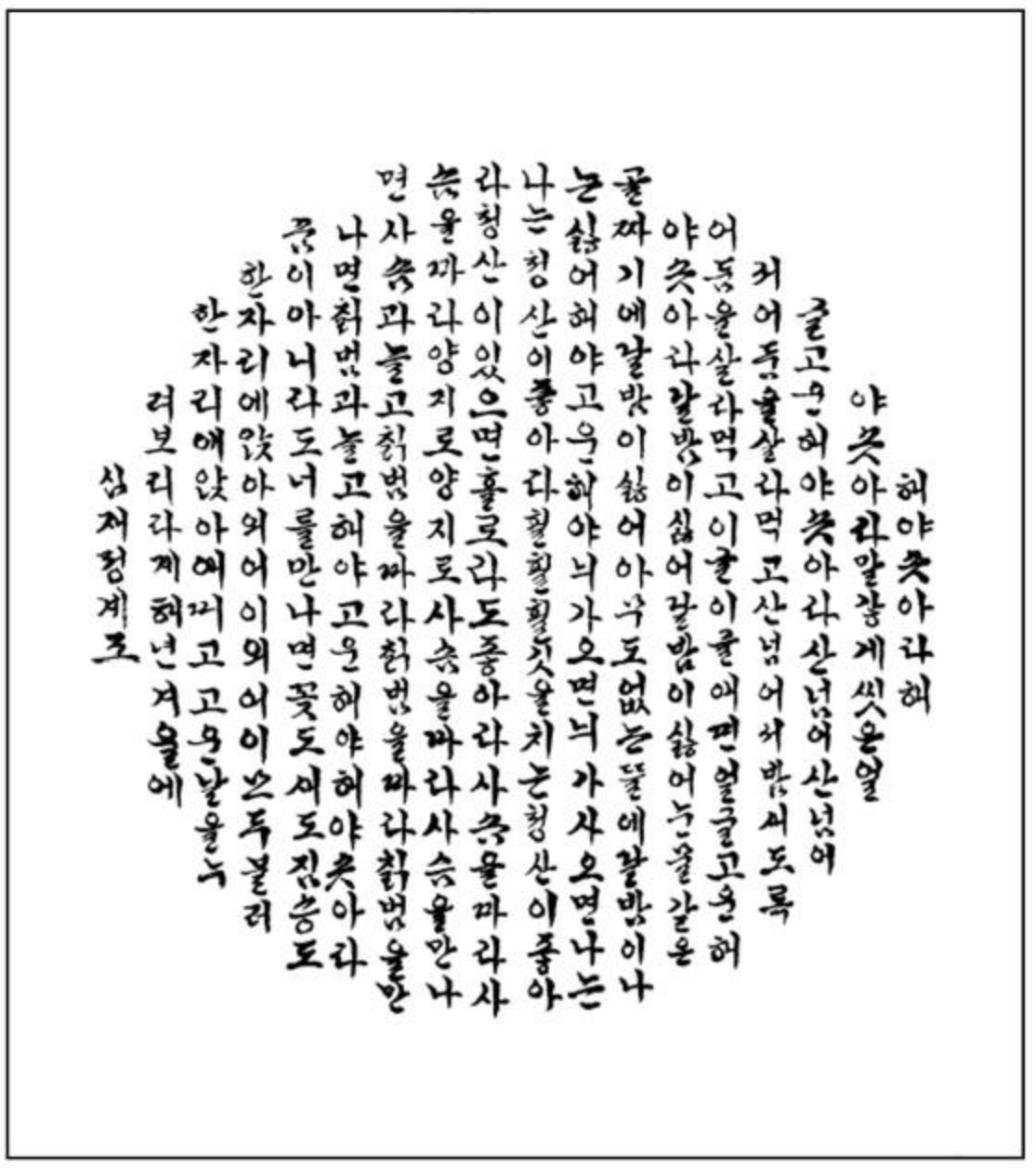
一、植島寛之　四回生
臨書　行書　大燈國師『與宗悟大姉法語』　全紙
「宗悟大姉只……」

行書にチャレンジしてみました。普段は楷書を書いていることが多く、原本が比較的楷書寄りなのでこの作品を臨書しました。線の速度の変化や空間をにせず左右にのびのびと広がっているところが面白い作品だと思います。



二、上田美幸　三回生
臨書　楷書　『ハングル書芸』　色紙

韓国でも書道はあるのかと疑問に思ったのがきっかけです。ちなみに韓国では「書道」ではなく「書芸」と言うそうで、ハングルで書かれたものだけではなく、漢字もあります。この作品と作者は私の拙い韓国語能力とネットでは調べられませんでした。書展のときには調べられているといいんですが…。

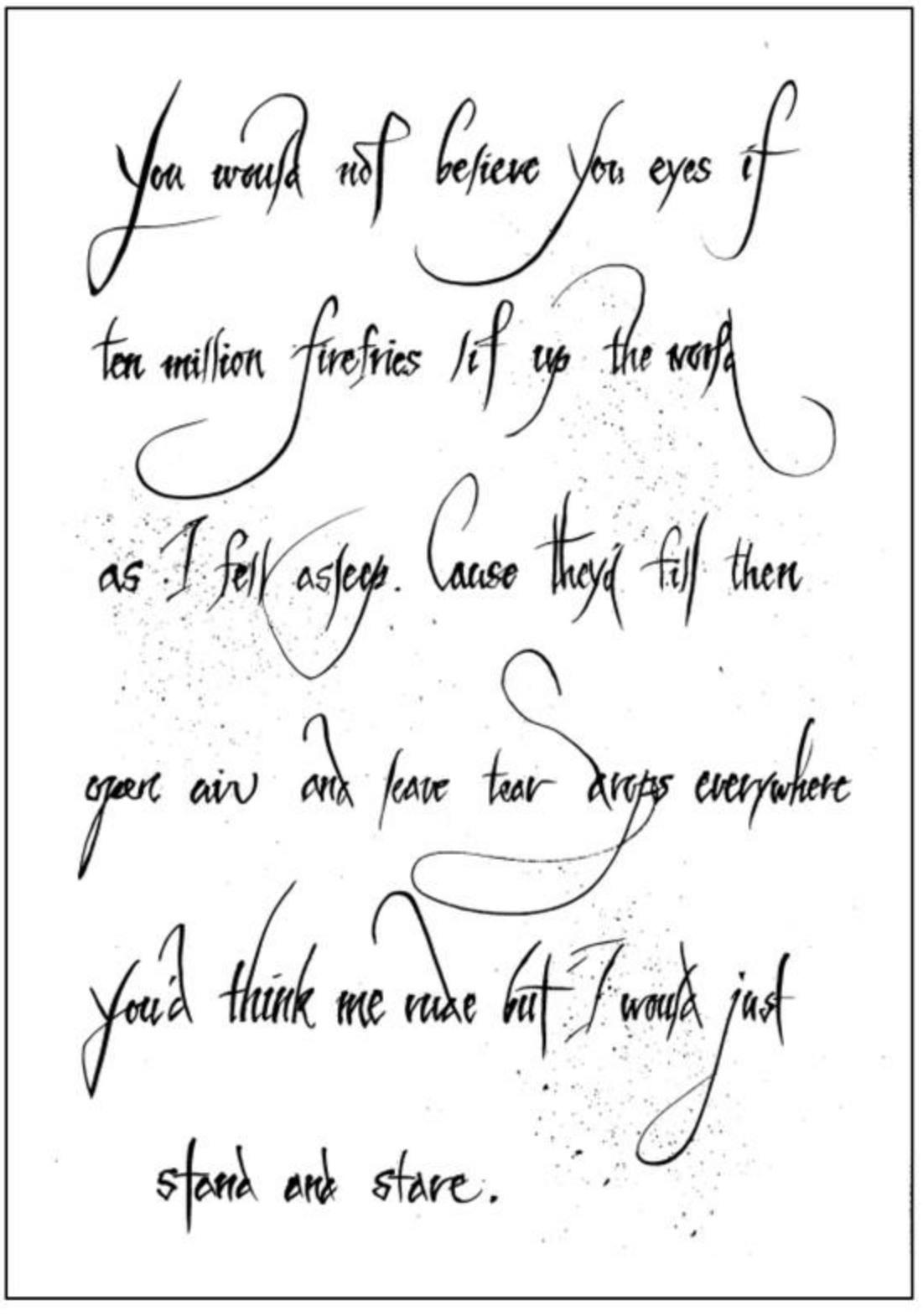


三、大庭諒介　四回生

創作　英字書　『幻想空間』　行灯

「You would not believe your eyes/If ten million fireflies/Lit up the world as I fell asleep/Cause they'd fill the open air/And leave tear drops everywhere/You'd think me rude but I would just stand and Stare/I'd like to make myself believe/That planet Earth turns, slowly...」

詩文はOwl City『fireflies』より。何千もの蛍の群れを初めて見た頃の感動は、今も私の胸の奥底で眠り続けています。その頃と今の自分は環境も思考もかけ離れたものだけど、その間に時間は確かに流れ続けていて、いつか味わった感動を追体験するように、私はこの作品を描いているように感じています。今年も蛍を見に行かなくっちゃ。



四、片野裕太　二回生

臨書　行書　米芾『苕渓詩巻』　半切

「松竹留因夏渓山去為秋久賡白雪詠」

夏と秋と雪を一枚に書けるし、どっしりかまえた感じがかっこよかったので選びました。きりっとしたりもっちりしたりの差を意識したつもりです。



五、河原理恵　二回生

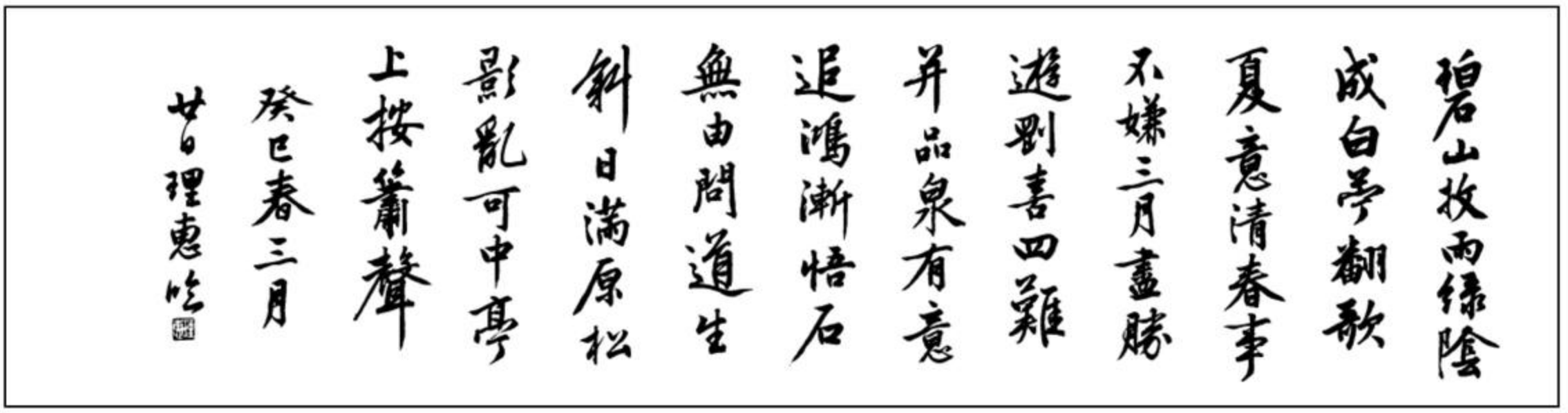
創作　篆書　『百福図』　聯落

「福福福福福福福福福福……」

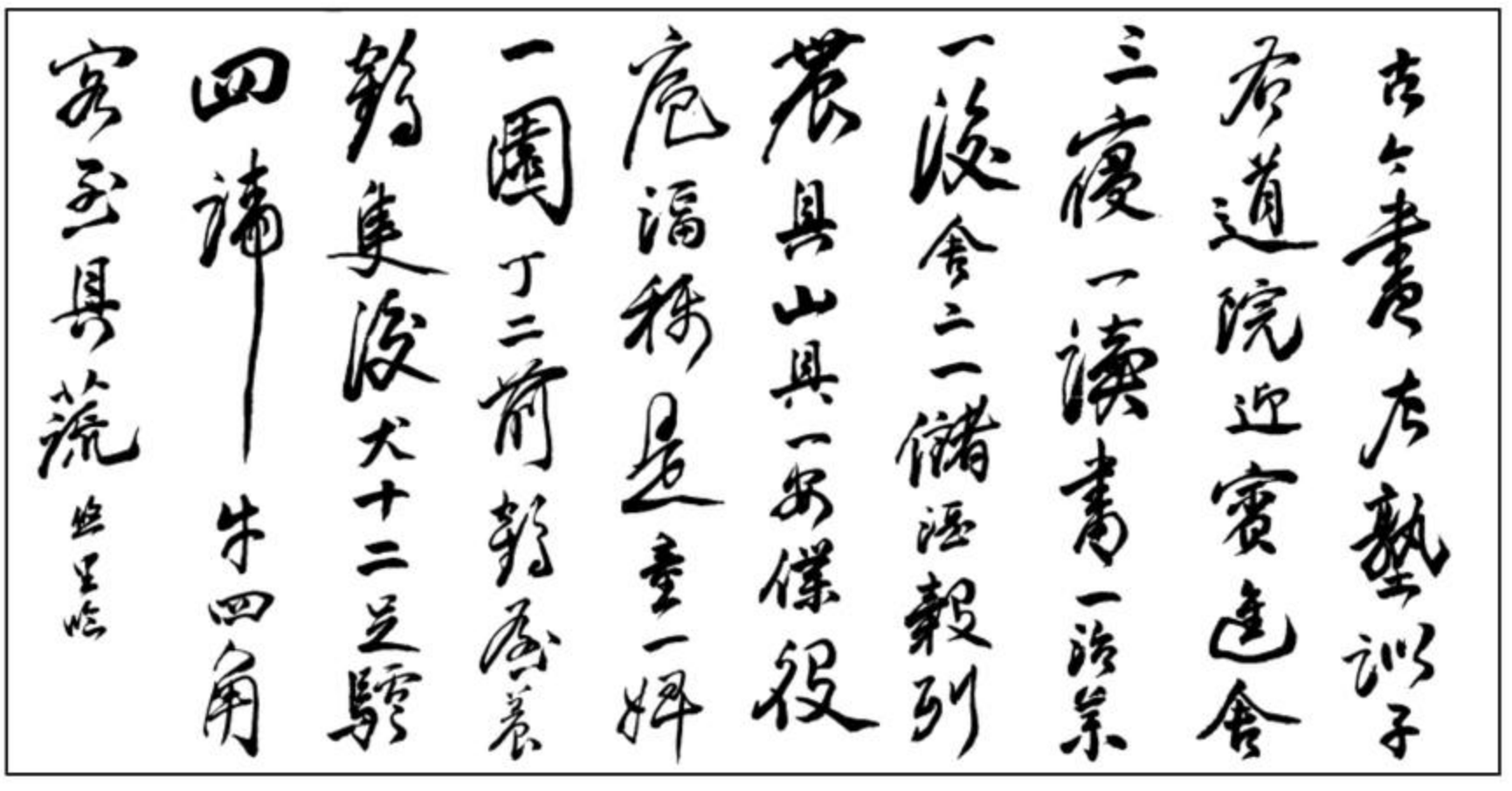
みんなの幸福を願いながら書きました。と、言いたいところですが、各字がゆるキャラやら妖怪やらに見えてきて、もう願うとかそれどころじゃなかったです。



六、河原理恵　二回生
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切横
「碧山収雨緑陰成白苧歌翻夏意清春事不嫌三月盡勝剛喜四難……」
この作品が兼ね備えている、鋭さと柔らかさの両方を表現できるよう心掛けました。少し離れたところから全体を見て雰囲気を、近づいて一字一字を見て筆遣いを感じとっていただけたら幸いです。


碧山收雨綠陰
成白苧翻歌
夏意清春事
不嫌三月盡勝
遊剛喜四難
并品泉有意
追鴻漸悟石
無由問道生
斜日滿原松
影亂可中寓
上按簫聲
癸巳春三月
河理恵臨

七、菊池悠里　三回生
臨書　草書　鄧石如『正草篆隷墨寶册四體帖』　全紙横
「古今書。左塾訓子。右道院迎賓。進舎三……」
文字の傾き、大小の変化、微妙な線の震え……など一癖も二癖もある法帖でしたが、その分、書くたびに新たな発見があり楽しみながら書くことができました。見る人にも、この作品の、実は変わっているところを見つけて楽しんでいただきたいです。



八、小島健史　二回生
臨書　行書　聖武天皇『雑集』　聯落
「池鳥宣布樓風演未曽真珠變鳥色妙法滿風音洗心甘露水悦眼」

〝狭視的な臨書作品〟をテーマに、聖武天皇の『雑集』を臨書しました。整った字形、直線の勢、起・終筆の角度や強さ、何より「ひっかけるような独特」の転折など、とにかく微に細に追及しました。構成は少し行間を開け縦に三行。暑い日が続くので、少し爽やかな雰囲気を狙ってみました。



九、小松聡子　三回生
臨書　楷書　作者不明『紺紙金字心経』　三尺×六尺横
「摩訶般若波羅蜜多心経　観自在菩薩……」

投げ出したくなったりもしましたが、出来上がった時の達成感が気持ちよすぎて、もう一度やりたいくらいです。
本当に楽しかった！

摩訶般若波羅蜜多心経
観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不浄
不増不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无
罣导无罣礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿褥多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等
咒能除一切苦真實不虚故説般若波羅蜜
多咒即説咒曰
揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提娑婆訶
般若心経

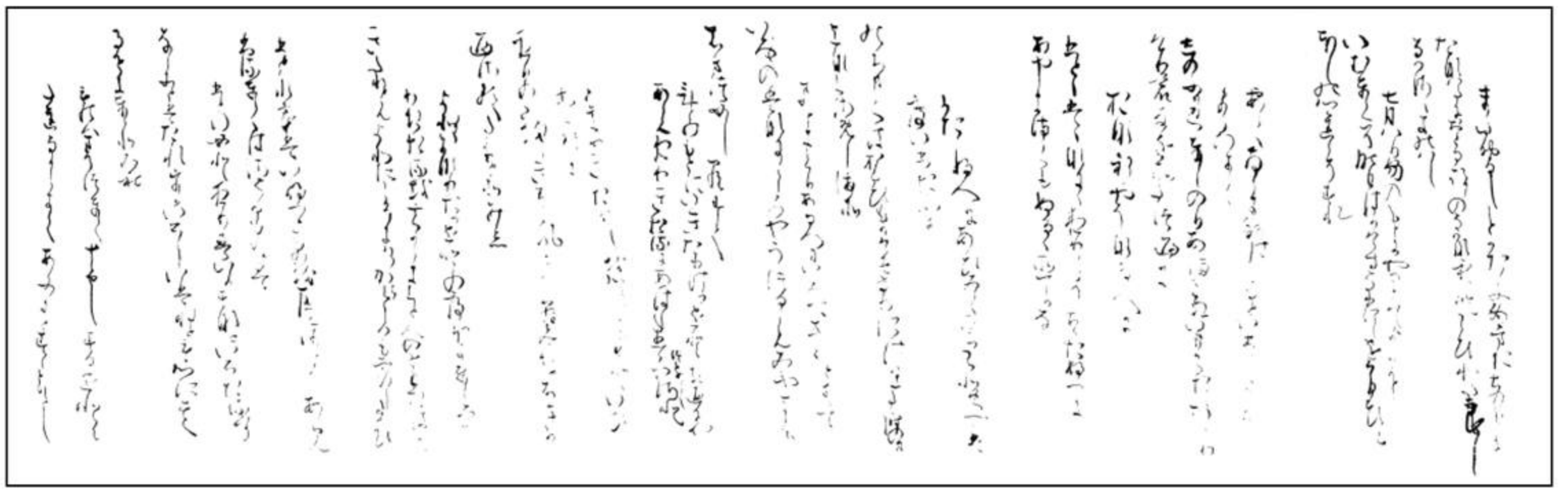
癸巳仰月上澣聡子臨

十、柴田尚紀　二回生
臨書　かな　藤原行成『和泉式部続集切』
巻子

「また（多）、おな（奈）じこと、かたふ
女方たちのもとに　たな（那）ば（八）た
（多）に（示）おとる許のな（奈）か（可）
な（那）れ（礼）ど（登）こひわたら（良）
じな（奈）か（可）さ（佐）ゝぎ（支）の
（能）は（八）し　七月八日、男のも
（示）やるとて、よませ（世）しいむと
（東）て（弓）ぞ（曽）昨日はか（可）に
（介）ずな（奈）り（利）にしを今日ひこ
ぼ（本）しの（能）心ち（遅）こそ（曽）
す（春）れ……」

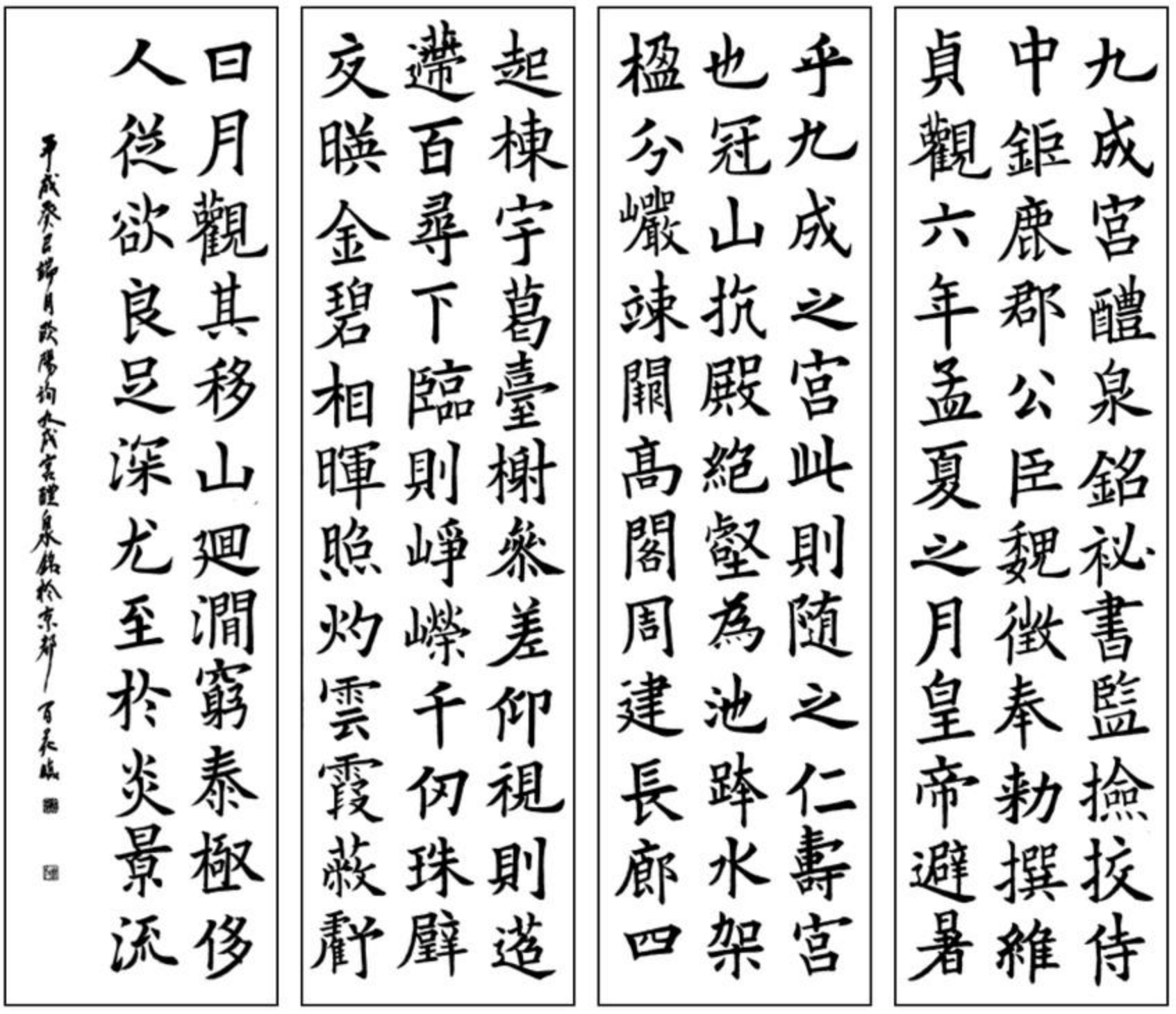
作品を書く前にたまたま夏目漱石の夢十夜の第六夜を読む機会がありました。最後に「遂に明治の木には到底仁王は埋まっていないものだと悟った。それで運慶がまで生きている理由も略解った。」という文章に考えさせられ、今回この作品に取り組みました。

藤原行成が今日まで生きている理由がなんとなく解った気がしました。



十一、中谷百花　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切四連
「九成宮醴泉銘秘書官檢校侍中鉅鹿郡公臣魏徵奉勅撰……」

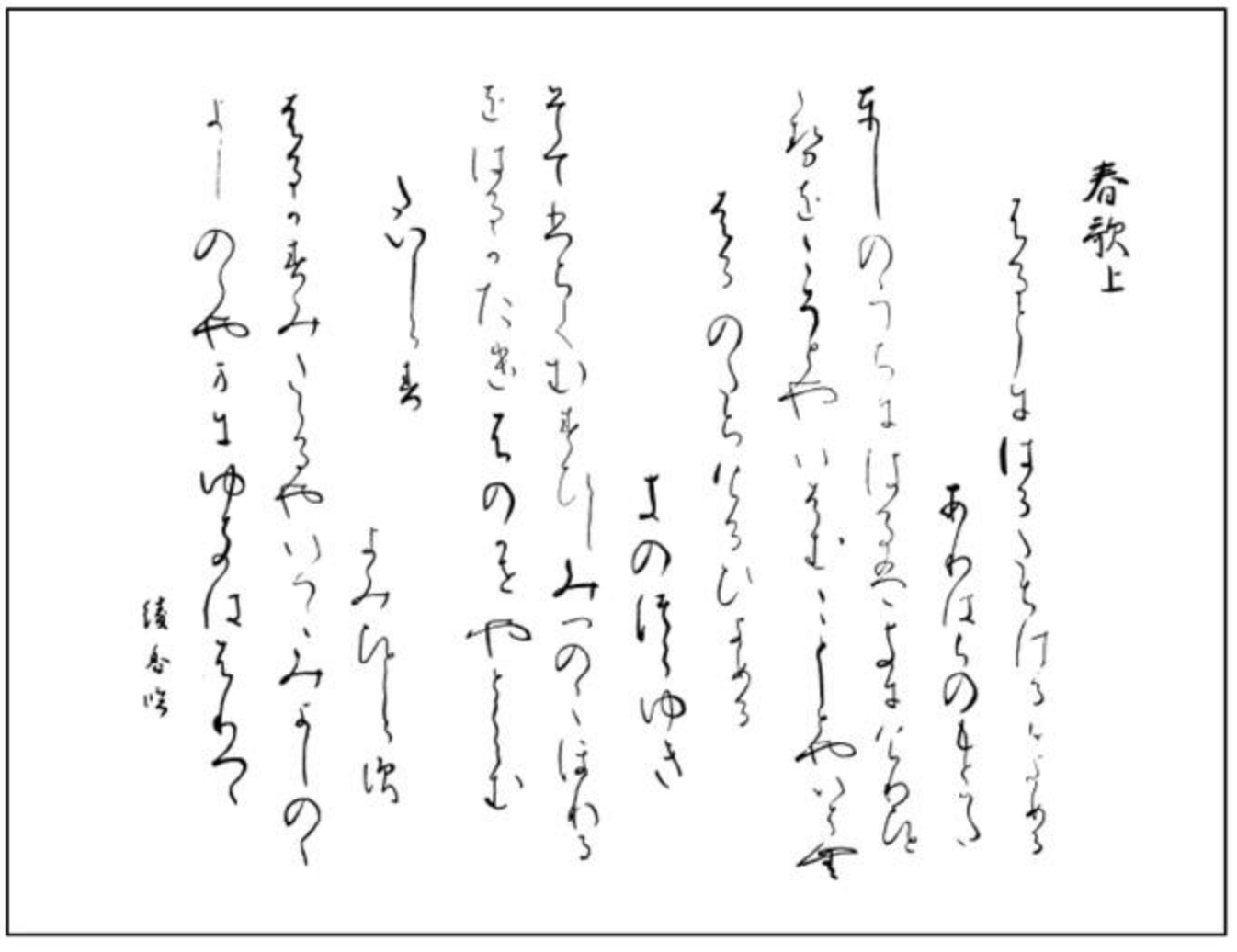
個人的に思い入れのある九成宮醴泉銘を臨書しました。凛としたイメージの作品にしたかったのですが、鋭い線質を出したり、大きさを揃えたりするのに苦労しました。一度多字数で書いてみたかったので、この機会に挑戦できてよかったです。ご批評よろしくお願いします。



十二、中野綾香　二回生
臨書　かな　伝紀貫之『高野切第一種』　半懐紙

「春歌上　ふるとしにはるたちける日よめる　ありはらのもとかた　としのうちにはるはきにけりひと〻せをこぞとやいはむことしとやいはむ……」

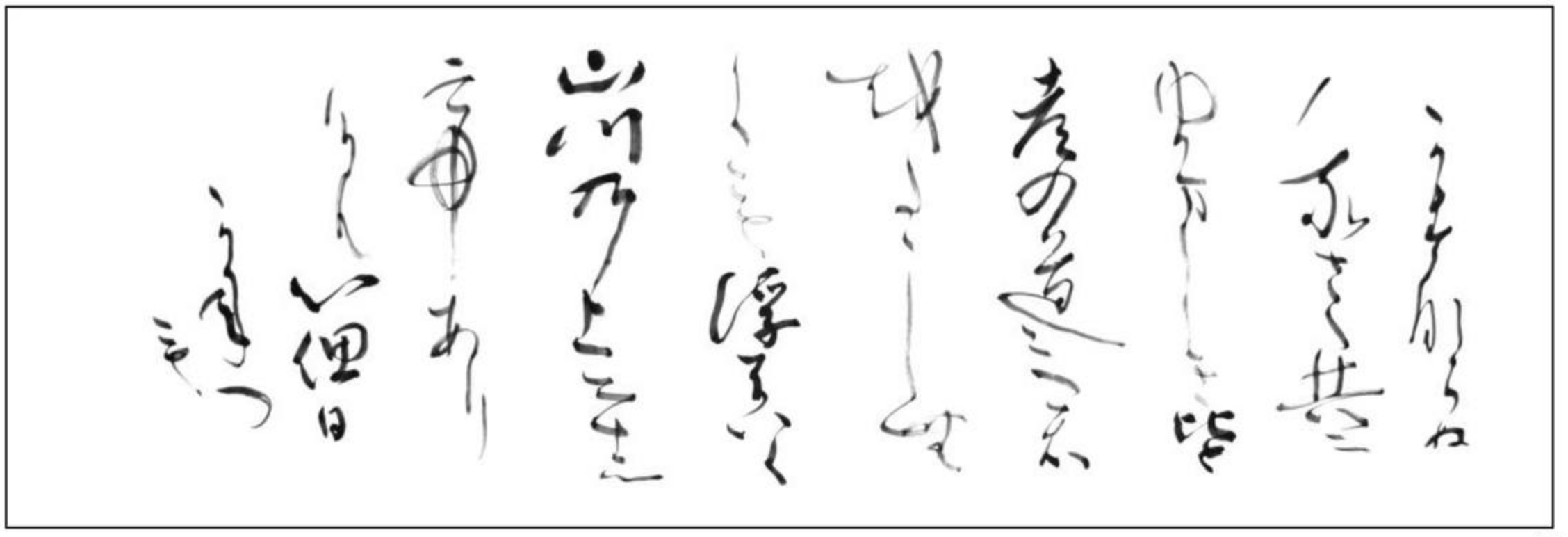
かなを書いてみたいと思いたち、王道といわれる高野切に挑戦してみました。線の優雅な美しさを少しでも出すことができていれば嬉しいです。



十三、橋詰奈央　三回生
創作　かな　『かずならぬ…』　二尺×六尺横

「数ならぬ影さへ共にゆかましきひとつの道に君をただしむ〳〵雲浮かぶいく山川の上にしてありけん心偲びかねつも」

かな創作に初挑戦しました。どうするのも自分次第、ルールのない「創作」は難しくもあり、また楽しいものでした。かなを始めて8年間、古典の臨書に頼り切り、自分なりの表現をする努力を怠ってきたのではないかと反省しています。拙い作品ですが、ご批評よろしくお願いします。



十四、東村智佳　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切二連
「雲氏龍官。亀図鳳記。日含五色。烏呈三趾。頌不輟工。筆無停史。上善降祥。」

再び九成宮に挑戦しました。文章の切れ目を意識した構成です。最初に画数の多い字が並ぶという、作品としては不適と思われる個所を選びましたが、これはどうしても「龍」の字が書きたかったから。その欠点をカバーするため、文字の大きさと太さを変化させることに最も気を配りました。欧陽詢リスペクト。



十五、藤井結稀　三回生
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　半切
「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒来暑往秋収冬蔵閏餘成歳律呂調雲致露結金生麗水玉崑」

強弱のメリハリがあって端正な感じを目指していたのですが力強い感じになってしまいました。ご批評宜しくお願いいたします。



十六、藤田雄也　二回生
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　半切
「夏意清春事不嫌三月尽勝」

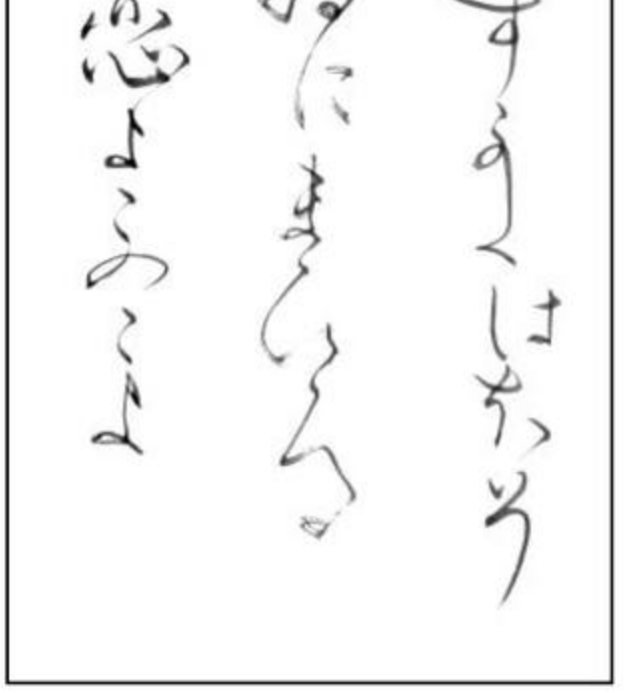
その圧倒的なかっこよさに魅かれて、今回文徴明を書くことにしました。特徴的な鋭い線、右肩上がりの字体に重点を置きました。文徴明のかっこよさが表現できていたらうれしいです。



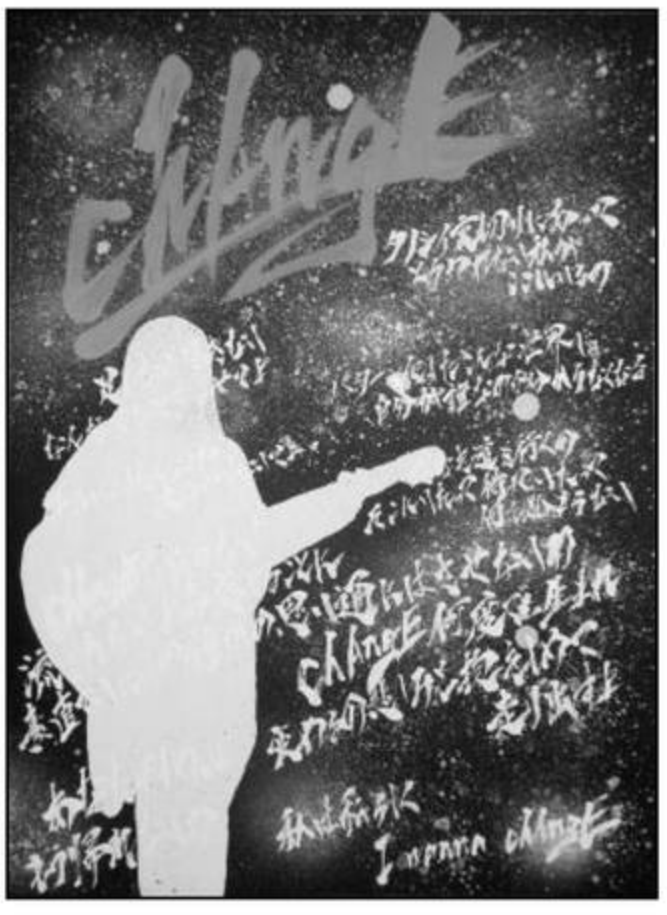
十七、水谷慈　修士二回生
創作　隷書　『快』　半切
「適正以琴恰情以酒」
私のモットーです。ずーっとこのまま生きていけたらと思っています。（笑）ゆったりとした気持ちでご覧いただければ幸いです。



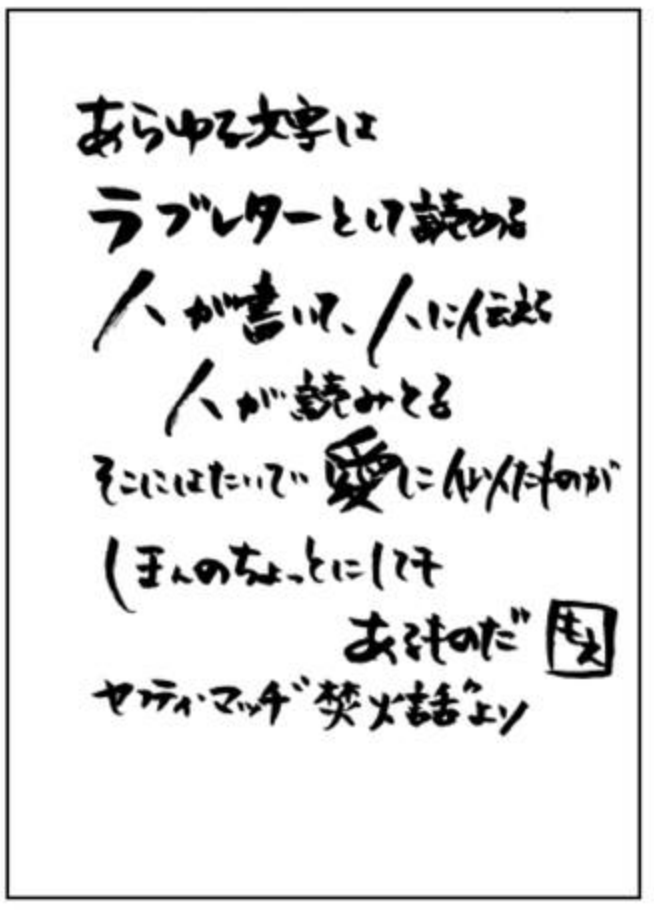
十八、山口萌　四回生
創作　かな交じり　『夏花』　聯落
「夏花のすがたは細きくれないに　真昼いきむの恋よこの子よ」
去年に引き続き与謝野晶子の歌を選んでみました。大胆なイメージが私のなかで強かったのですが、この歌はかわいらしい感じ。文末に「♪」が付きそうな雰囲気をかな交じりで表現してみました。いいことが起こりそうな予感に満ちた期待が伝わってくれますように。



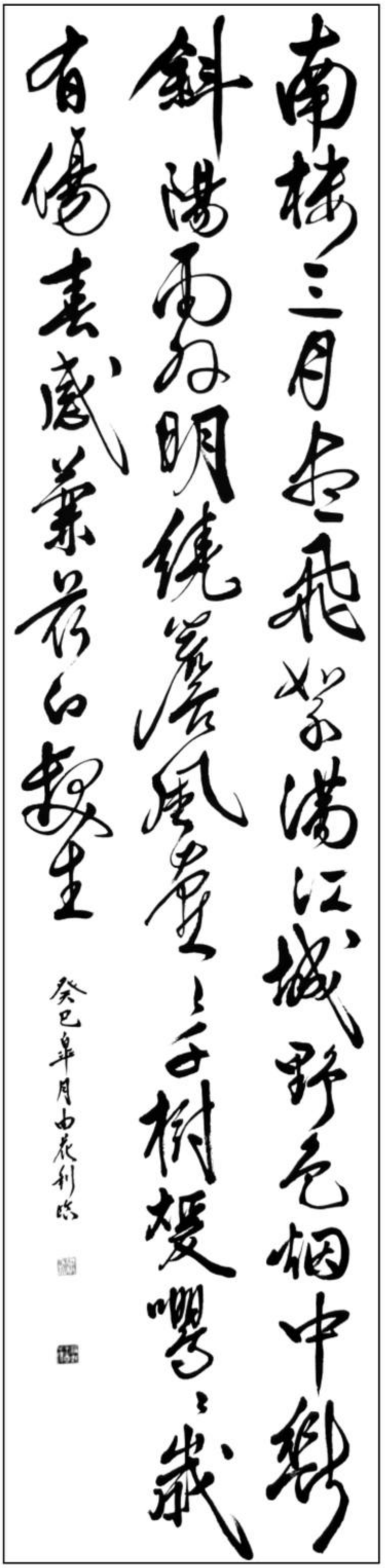
二十、山本大翔　三回生
創作　調和体　『chAngE』　色紙
「chAngE なびかない流されないよ・・・」
自己満足作品です。スプレーの雰囲気をもう一つの作品と変えてみました。



十九、山口萌　四回生
創作　調和体　『ラブレター』　色紙
「あらゆる文字はラブレターにみえる　人が書いて、人に伝える、人が読みとる　そこには愛に似たものがほんのすこしでもあるものだ」
これはほぼ日手帳が届いたときの箱に書かれていて、ぐっと来て思わず真新しい手帳に真っ先に書いた、思い入れのある言葉です。私が作品を作るスタンスに似ている様な感じがしたので。私が創作するのは、まず書く言葉ありきで、その言葉の雰囲気とか伝わってほしいなぁって。愛も含まれてるかなって。



二十一、稲葉由花利　二回生
臨書　行書　文徴明『南樓傷春詩』　二尺×八尺
「南樓三月盡、飛絮滿江城。野色烟中斷、斜陽雨外明。繞簷風燕燕、千樹煖鶯鶯。歲有傷春感、兼茲白髪生。」
初めて二八サイズの作品に挑戦しました。おっかなびっくり書いて字が小さく弱弱しい感じになったり、調子に乗って楽しく書きすぎて「猪突猛進型」の作品になったりという変遷を経てきました。太いところと細いところのメリハリのある作品に仕上がっていればと思います。



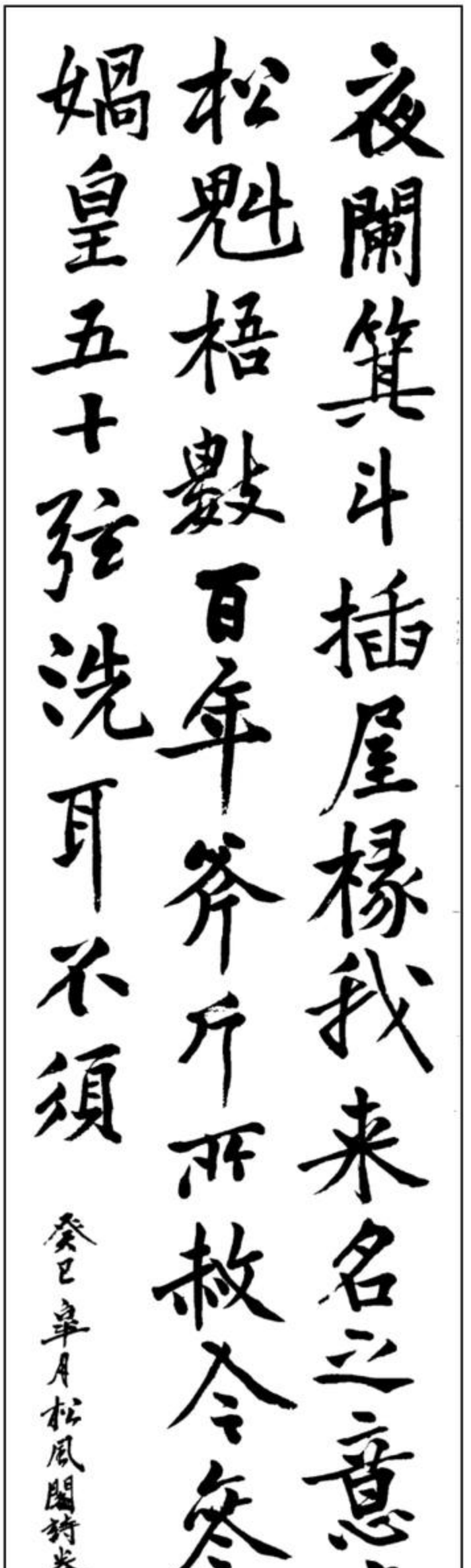
二十二、大泉陽輔　三回生
創作　隷書　『月狼』　二尺×八尺
「澄天寒月哮狼聲」
某日、下弦の月を眺めながら。



二十三、柴田翔　三回生
創作　行草　『楓橋夜泊』　二尺×六尺
「月落烏啼霜満天、江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船。」
以前、縁あって中国語のスピーチ大会で諳んじた張継の五言詩を、主に王鐸から集字して創作した。臙難の末最後に辿りついたのがこの構成。これまでに積み上げた臨書経験の上に立ち、その高みから俯瞰した作品となったのか…。
字体の変遷を経ることになった。
はたまた、“自分らしさ”たる桎梏に囚われ、地を這いずり回りもがき苦しんだ作品になったのか…。



二十四、鈴木貴也　三回生
臨書　行書　黄庭堅『松風閣詩巻』　二尺×八尺
「夜闌箕斗插屋椽。我來名之意適然。老松魁梧數百年。斧斤所赦今參天。風鳴媧皇五十弦。洗耳不須」
以前書いていた文徴明と書風が似ていると感じつつも、横画に苦しめられました。



二十五、石博昭　二回生

臨書　楷書　『始平公造像記』　三尺×六尺

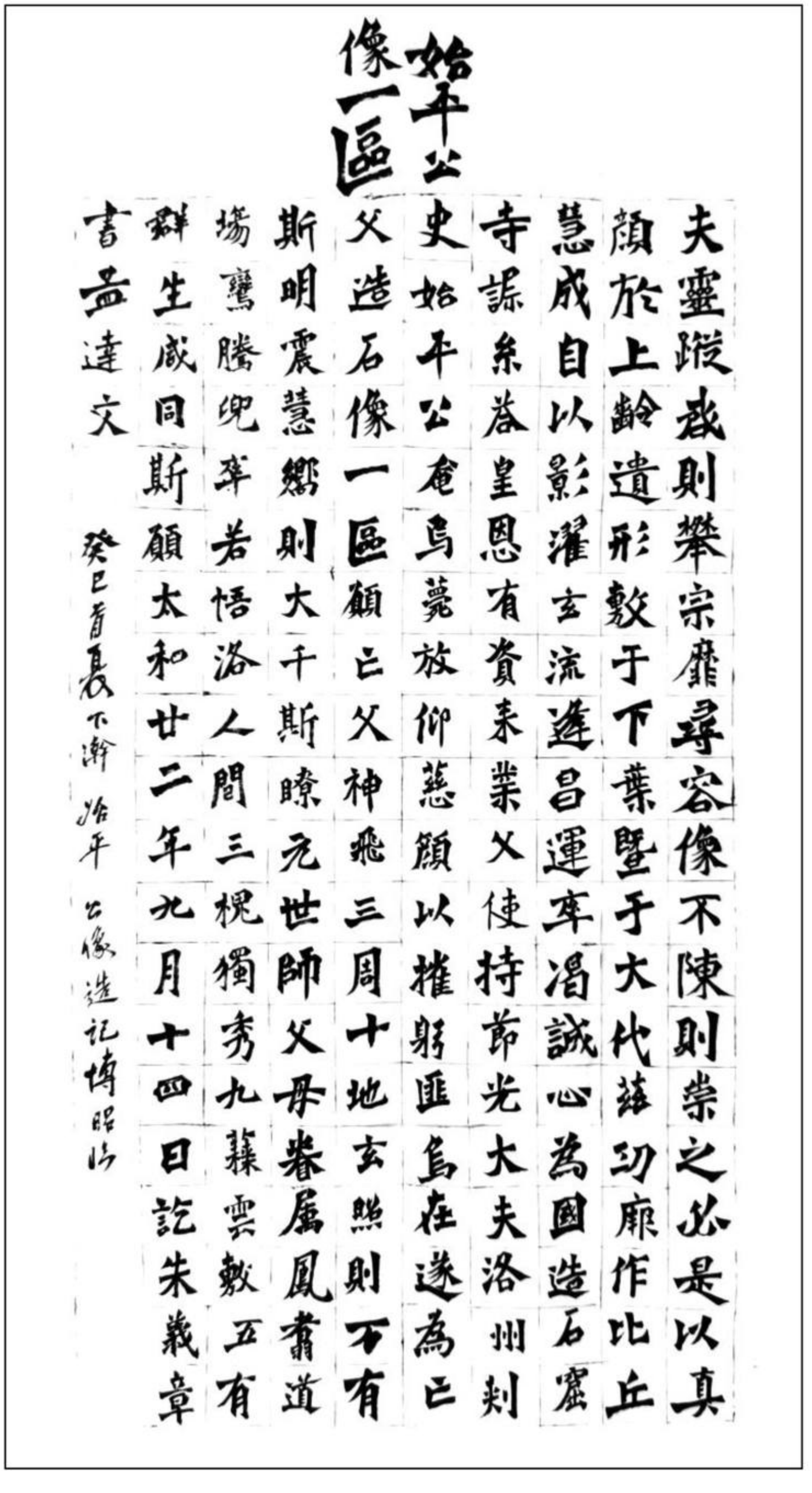
「始平公像一區……」

［締切に関する知見］

・締切の無い制作は無限に引き延ばされる

・制作を早める目的で早めの締切を設定しても効果が無い（物理的デッドラインが「本当の締切」として働く）

・時間は貯蔵不可能である　（verdamil より引用）

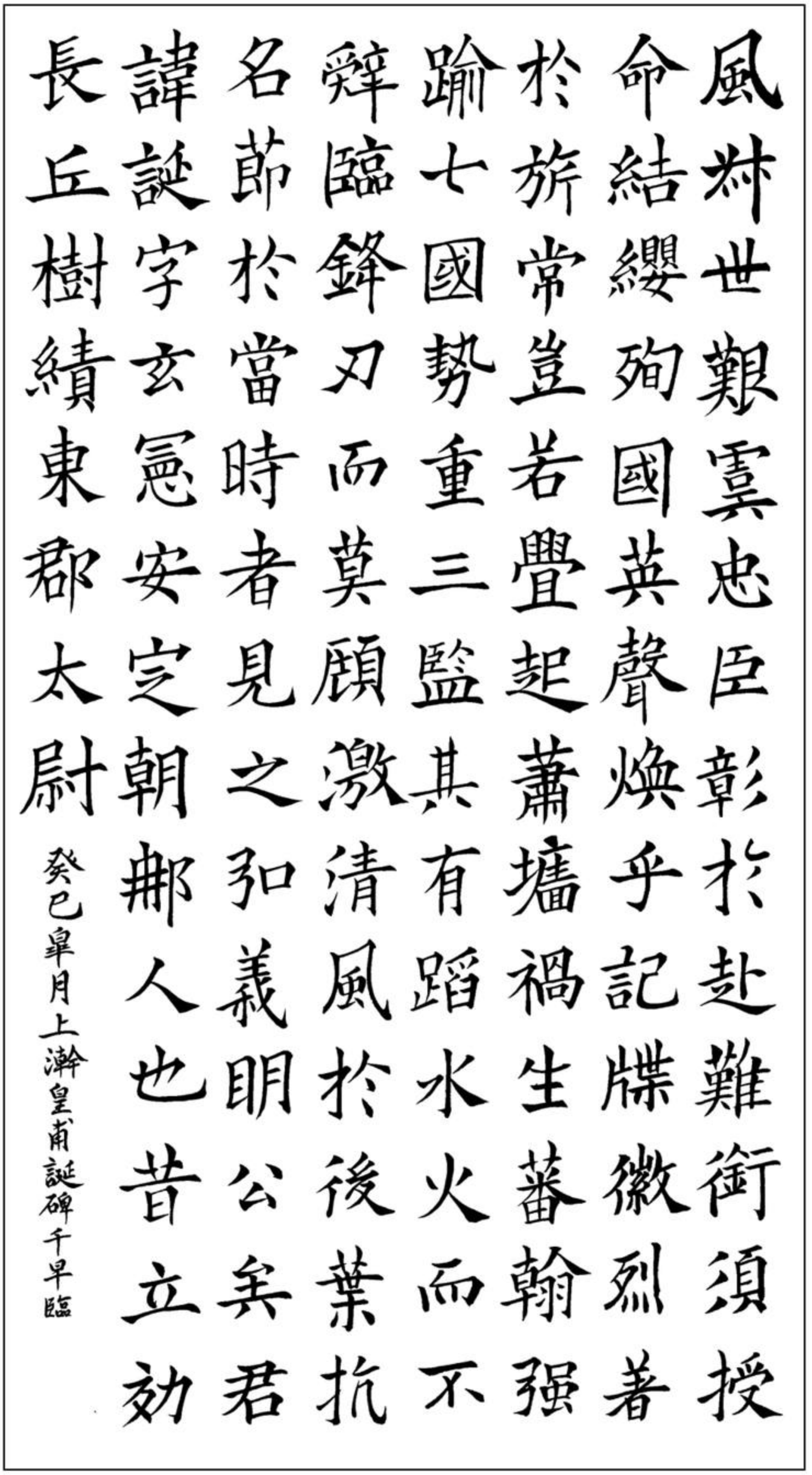


二十六、多門千早　三回生

臨書　楷書　欧陽殉『皇甫誕碑』　三尺×六尺

「風叔世艱具虞忠臣彰於赴難銜須授命結纓殉國英聲煥乎記牒徽烈著於旂常豈若釁起簫禍生蕃翰強踰七國勢重三監其有踏水火而不辞臨鋒刃而莫顧激凊風於後葉抗名節於當時者見之弘義明公矣君諱誕字玄憲安定朝那人也昔立効長丘樹績東郡大尉」

多字数は集中力が要ります。根気が要ります。なぜこんな構成にしてしまったんだろうと一度は後悔します。でもまた多字数を選んでいる自分がいます。多字数楷書の魅力に取り憑かれているんでしょうね。

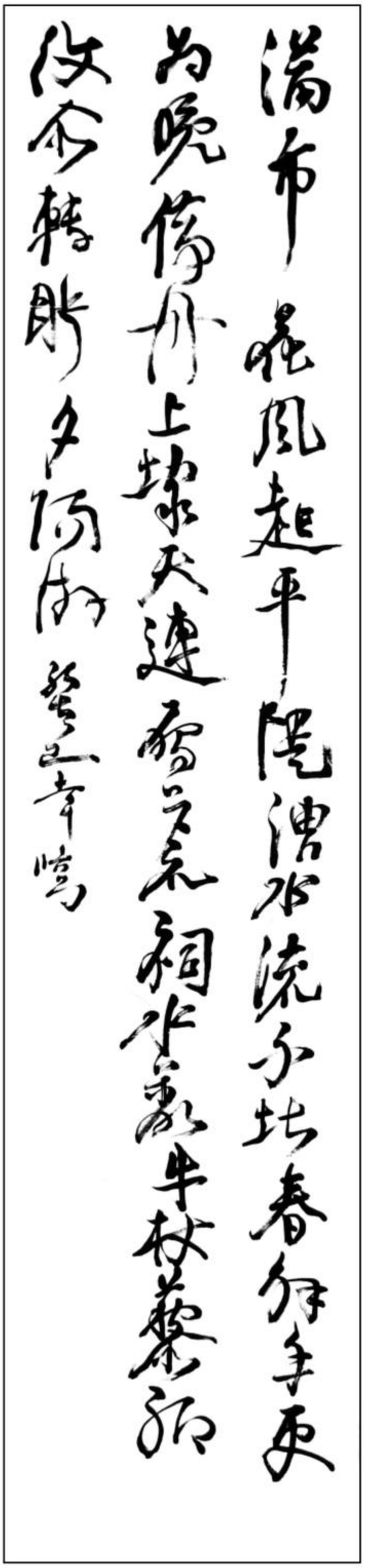


二十七、　寺西幸　三回生

臨書　行草　倪元璐『行草五言律詩軸』　二尺×八尺

「滿市花風起　平隄漲水流　上埭天連雁　荒祠水蔽牛　更爲晩停舟　枝藜聊復尒　轉盼夕陽遊」

マクロに感じ、ミクロに学ぶ。そのバランスが難しかったです。

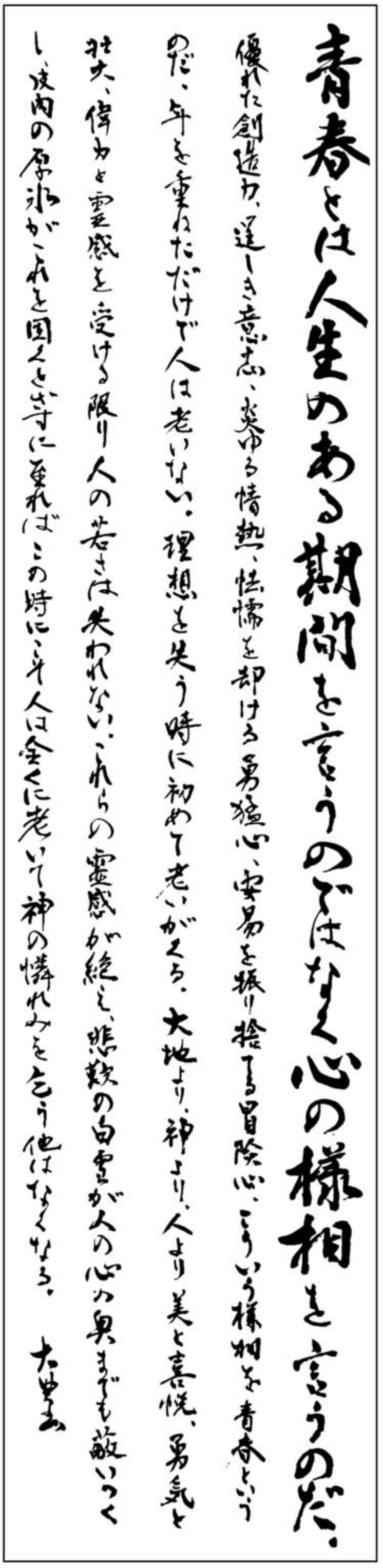


二十八、　時藤大典　四回生

創作　調和体　『青春』　二尺×八尺

「青春とは人生のある期間ではなく心の様相を言うのだ。……」

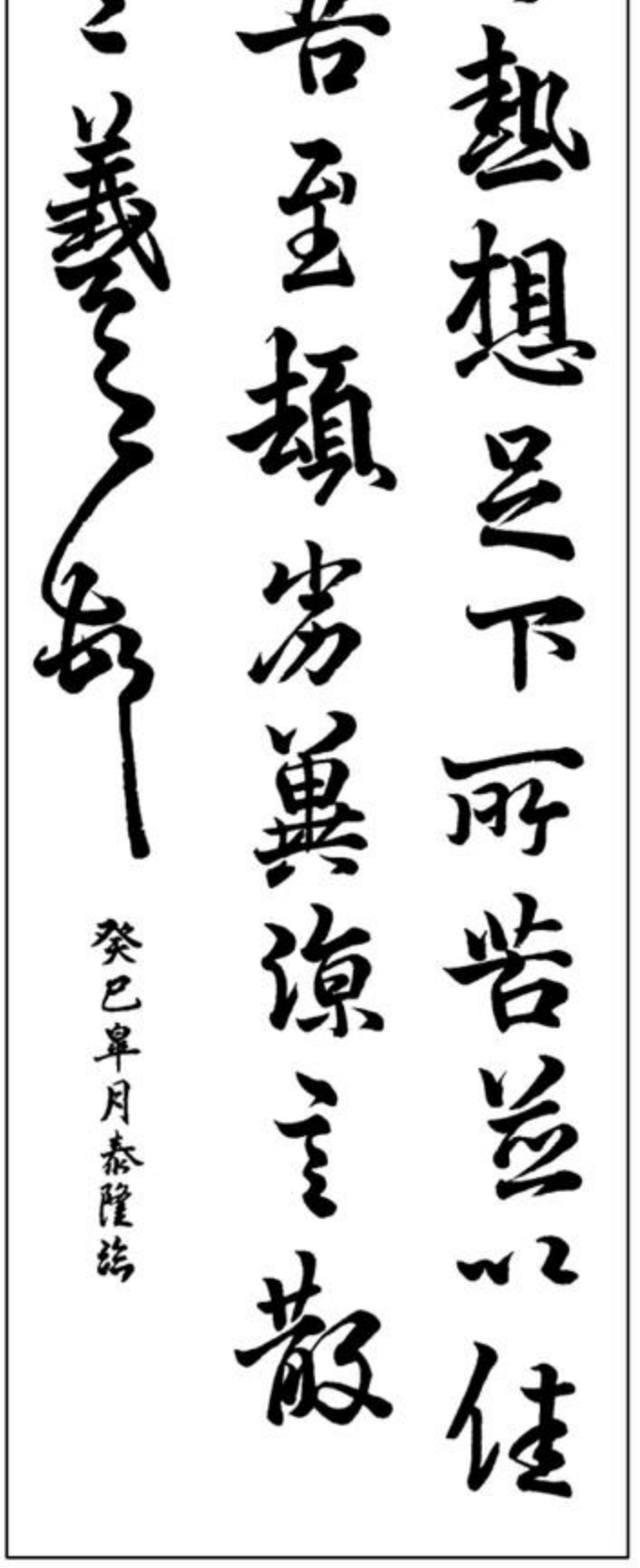
サミュエルウルマンの詩を一部抜粋して書きました。この詩は実家の廊下に飾ってあり、帰る度にええ詩やなあと思っていましたが、何かぎこちなくなってしまいます。



二十九、檜山葵　三回生
臨書　行書　王鐸『香山寺作』　二尺×八尺
「細逕翠微入幽香塵跡稀　虚譚留色相響谷發清機　人淡聽松去僧閒洗薬歸　莫窺靈景外漠々一鷗飛」
大学に入ってからずっと書きたいと思っていた作品です。作品としてまとめるのに大変苦労しましたが、やはり自分は王鐸の書が好きなのだと再確認できました。ご批評よろしくお願いします。



三十、平野泰隆　三回生
臨書　行書　王羲之『晩復帖』　52cm×200cm
「晩復毒熱想足下所苦並以佳猶耿々吾至頓劣冀涼言散力知問王羲之頓首」
一回生で初出品の時に書いた王羲之の書を再び臨書しました。一年半ほどでどれくらい上達できたか…。特徴がないなどといわれることもありますが、やっぱり王羲之の書は好きです。ご批評のほどよろしくお願いします。



三十一、家倉凌　二回生

臨書　行書　空海『風信帖』　二尺×八尺

「風信雲書自天翔臨披之閲之如掲雲霧兼恵止観妙門頂戴供養不知攸厝已冷」

整然とした字を整然と並べて書くわけではない、けれども全体としては均整のとれた美しさがある・・・書道の魅力のひとつだと思っています。

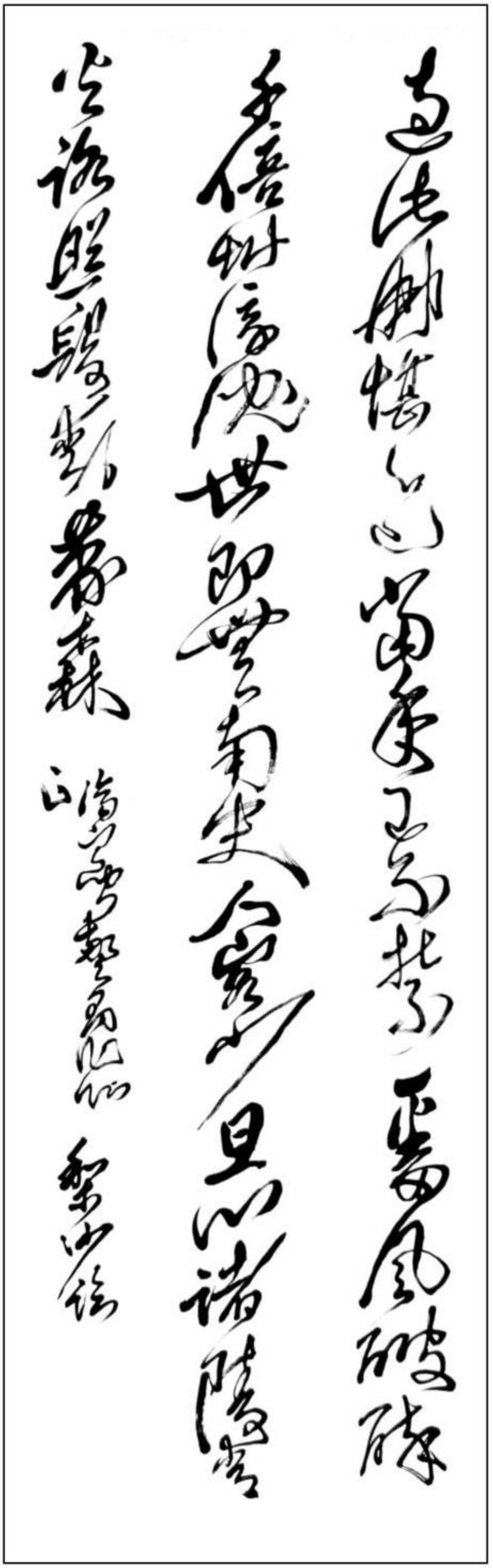


三十二、吉田梨沙　三回生

臨書　行草　黄道周『濟寧聞警有作』　三尺×八尺

「過此那慳遙　當年已不禁　一番風破碎　千倍艸浮沈　世即無南史　人客少膽心　諸陵爰火路　照髪動蕭森　濟寧聞警有作　叱正」

一行の中の揺れと行間の潔さに憧れて。紙のサイズに負けない迫力を目指し、体を大きく使うよう意識した。



三十三、渡辺健介　三回生

臨書　草書　傅山『五言絶句幅』　二尺×八尺

「朝日點紅妝擬上銅雀臺畫眉猶未竟魏帝使人催」

傅山の力強い線と行を揺らすようなパワーを追い求めました。再現できたか、是非ご批評ください。



◆作品紹介 —禅居庵—

三十四、浅野彰浩　三回生

創作　楷書　『千字文』　全紙

「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒來暑往秋收冬藏閏餘成歲律呂調陽雲騰致雨露結為霜金生麗水玉出崑崗劍號巨闕珠稱夜光菓珍李柰菜重芥薑海鹹河淡鱗潜羽翔龍師火帝鳥官人皇始制文字乃服衣裳推位讓國有虞陶唐弔民伐罪周發殷湯坐朝問道垂拱平章愛育黎首臣伏戎羌遐邇壹體率賓歸王鳴鳳在樹白駒食場化被草木賴及萬方蓋此身髮四大五常恭惟鞠養豈敢毀傷女慕貞絜男效才良知過必改得能莫忘罔談彼短靡恃己長信使可覆器欲難量墨悲絲染詩讚羔羊景行維賢克念作聖德建名立形端表」

一発勝負でひたすら文字をたくさん書いてみたい衝動に駆られて書き上げた。内容自体は『三體千字文』。漢字練習帳のマスの目にキレイに漢字を並べたような行儀のいい作品は嫌いなので、各行でそれぞれの文字が上下で接するようにして書くことで各文字の連続感を出したつもり。多字数の作品を見たときの印象というのは、個々の文字の巧拙よりも、整然と文字が並ぶことによる全体としての迫力に尽きると考え、それを意識して書いてみたが言うは易し行うは難しだった。

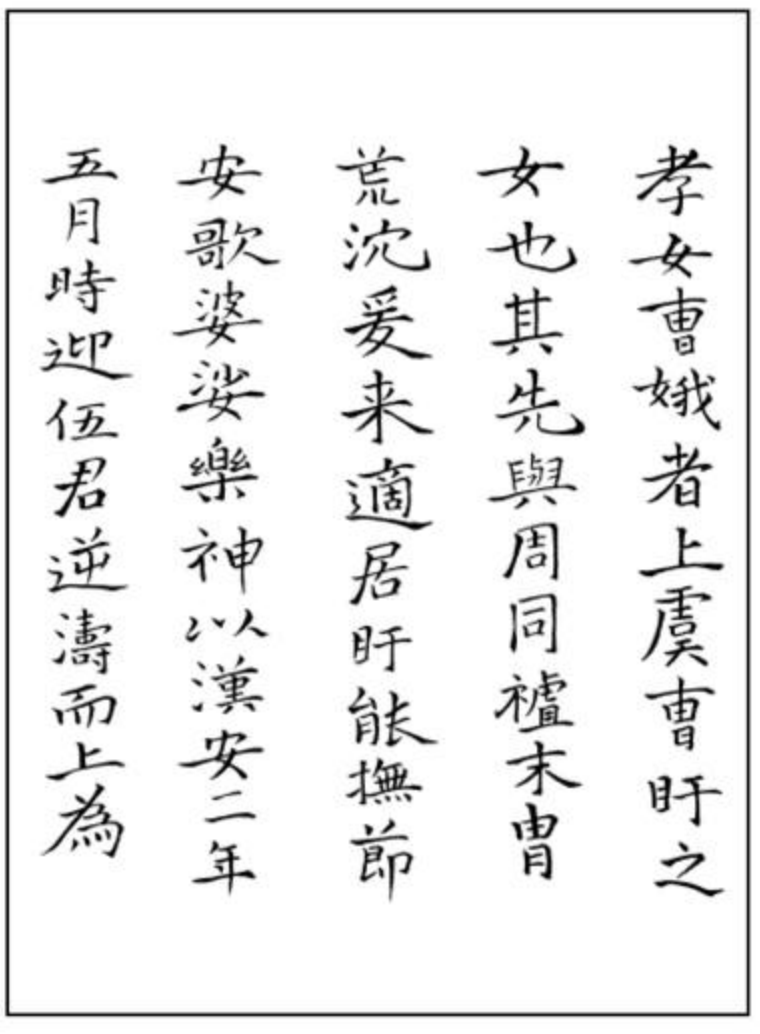


三十五、植島寛之　四回生

臨書　楷書　王羲之『孝女曹娥碑』　半切横

「孝女曹娥者……」

楷書の多字数に挑戦しました。一文字一文字が小さいため、墨量と線の強弱の調整に苦労させられましたが、最終的にはバランスがとれたものができたのではないかと思います。



孝女曹娥者上虞曹盱之女也其先與周同檀末曹荒沈爰来適居盱能撫節安歌婆娑樂神以漢安二年五月時迎伍君逆濤而上為

三十六、大石龍太　二回生

臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

「聖札飛毫動雲龍之気象天文挂塔」

顔真卿の多宝塔碑を臨書しました。自分の名前にある「龍」の字が含まれることが気に入って、この部分を選びました。前回の作品とは違い、紙全体に占める黒の部分の割合を多くしました。作品を見た時に与える力強い印象を気に入って頂けたら嬉しいです。



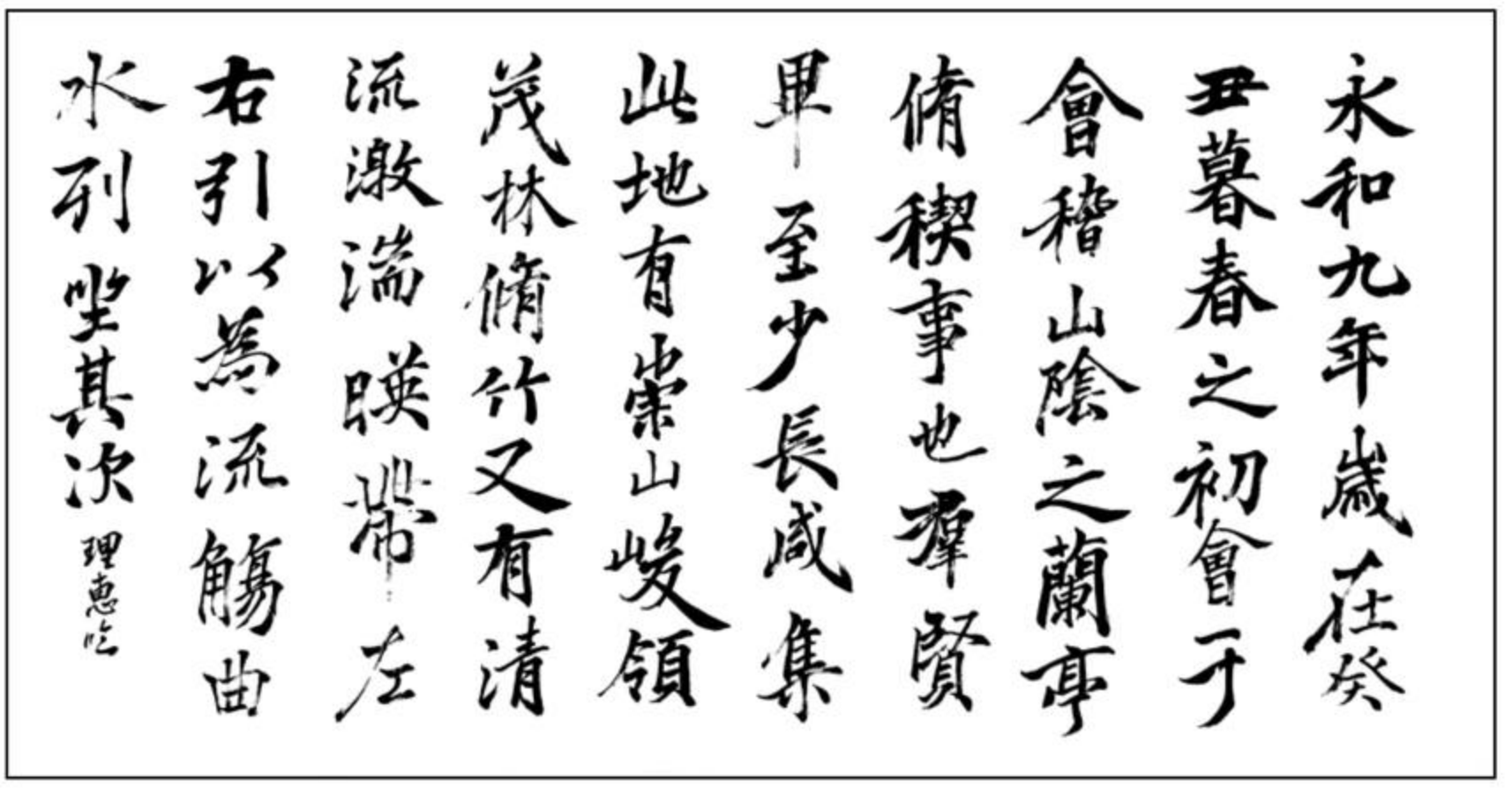


三十七、岡本悠　二回生
創作　行書　『知命者不惑』　半切
「知命者不惑（命知る者は惑わず）」
私も自分のすべきことをしっかりとわきまえて、迷わずすべきことをやり通したいです。

三十八、川上澄香　三回生
臨書　草書　智永『真草千字文』　半切
「誠美慎終宜令栄業所基籍甚無竟」
前回の書展で隷書の作品を書いたときに、リズム感をもって書くのも楽しいかもしれないと思い、今回は草書に挑戦しました。特に「籍」の字を書くときのリズムが好きです。



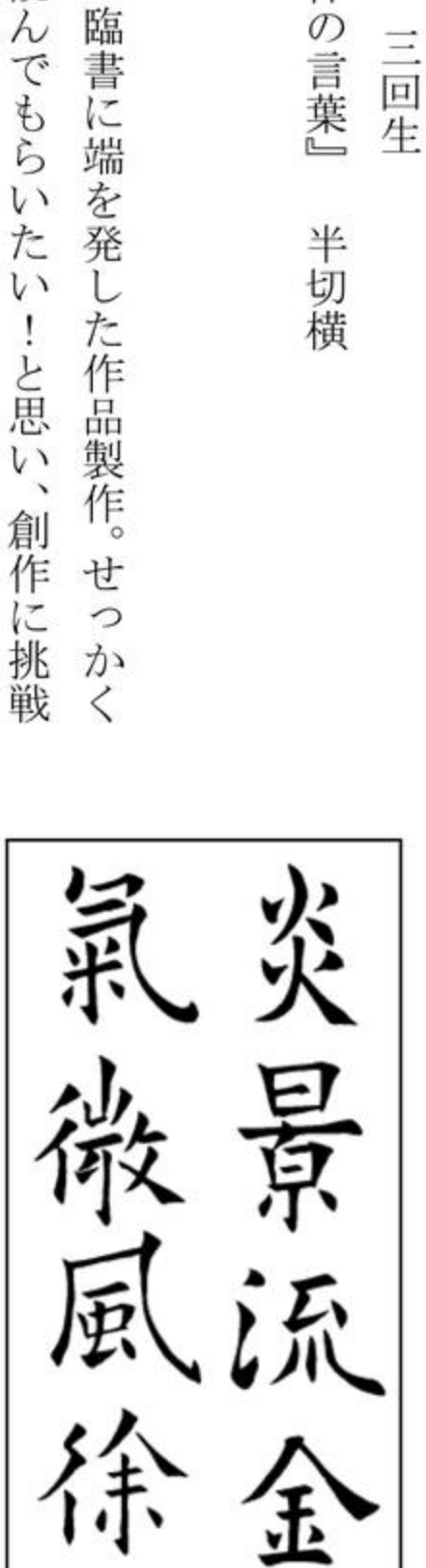
三十九、河原理恵　二回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭叙』　全紙横
「永和九年歳在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭……」
高校時代の恩師が、全紙横に羊毛でこの作品を書かれていたのを見た時の、いつか自分も書けるようになりたいという憧れを実現することができました。ずっと思い描いてきたものにはまだ及びませんが、私にとって思い入れの強い作品です。





四十、菊池悠里　三回生
創作　隷書『禅の言葉』　半切横
「莫妄想」

趙之謙の隷書の臨書に端を発した作品製作。せっかくの少数字だから読んでもらいたい！と思い、創作に挑戦しました。少しでも目にとめていただければ幸いです。





四十一、北堀雄大　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切二連
「炎景流金無欝蒸之……」

初めて出品する書道作品です。書いていくうちに、嫌だ嫌だと言いながらも、だんだん九成宮のカチッとした感じにより一層魅了されていったきがします。また時間をあけて、いつか再度挑戦します。

四十二、小島健史　二回生
臨書　行書　米芾『蜀素帖』　半切
「青松勁挺姿凌霄恥屈盤種々出枝葉」

〝瞰視的な臨書作品〟をテーマに、米芾の『蜀素帖』を臨書しました。字一つ一つを模倣するのではなく、抜き出した二行の漢字群を半切という新しい枠に閉じ込めながら原本の持つ雰囲気を再現することに努めました。今回はもう一つ作品を出していますが、どちらの作品についても、ご批評よろしくお願いいたします。



四十三、小松聡子　三回生
模刻　篆書　池永一峰『鳶飛魚躍』　30cm×38cm
「鳶飛魚躍」
模刻、たのしいです。もっと精進します。



四十四、佐藤綾美　四回生
臨書　行書　董其昌『菩薩蔵経後序』　半切
「澄心妙法之寶奉述天旨微表讃揚式命司存」
先輩の作品に憧れて挑戦した董基昌ですが、すっきりした感じがうまく出せず苦労しました。ご批評よろしくお願いいたします。



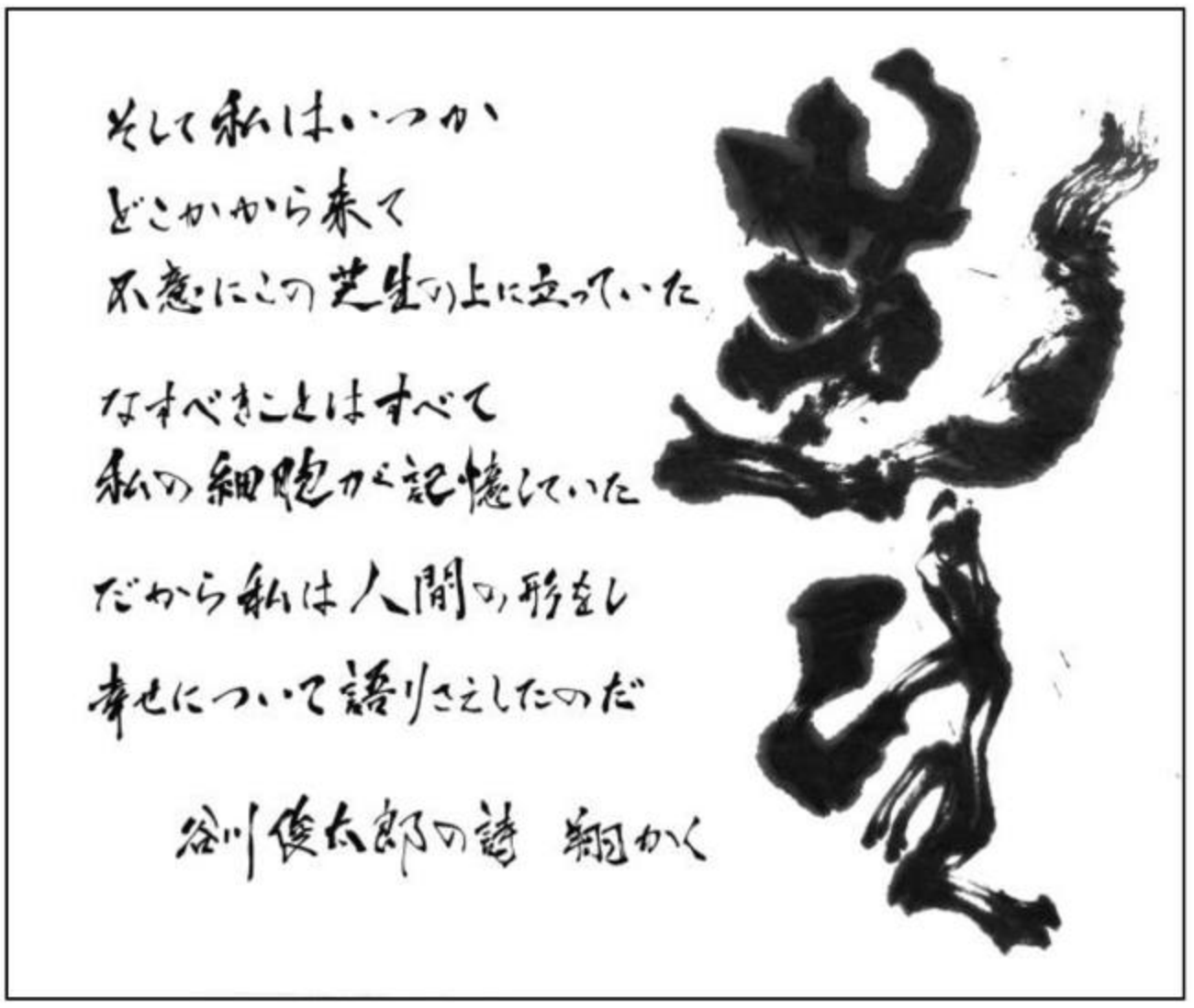
四十五、柴田翔　三回生
創作　篆書　『徧眇曾て藏さず』　半切横
「徧眇不曾藏」
〝この大宇宙は何も隠してはおらず、全ての真理は明らかにされている。真実を知りたければ己を取り巻く世界をよく観よ〟という意味の禅語。科学を志す者として、真理を究する上で肝に銘じておきたい言葉です。
探うたて



四十六、柴田翔　三回生
創作　調和体　『芝生』　50cm×70cm

「《芝生》　そして私はいつか　どこかから来て　不意にこの芝生の上に立っていた　なすべきことはすべて　私の細胞が記憶していた　だから私は人間の形をし　幸せについて語りさえしたのだ」

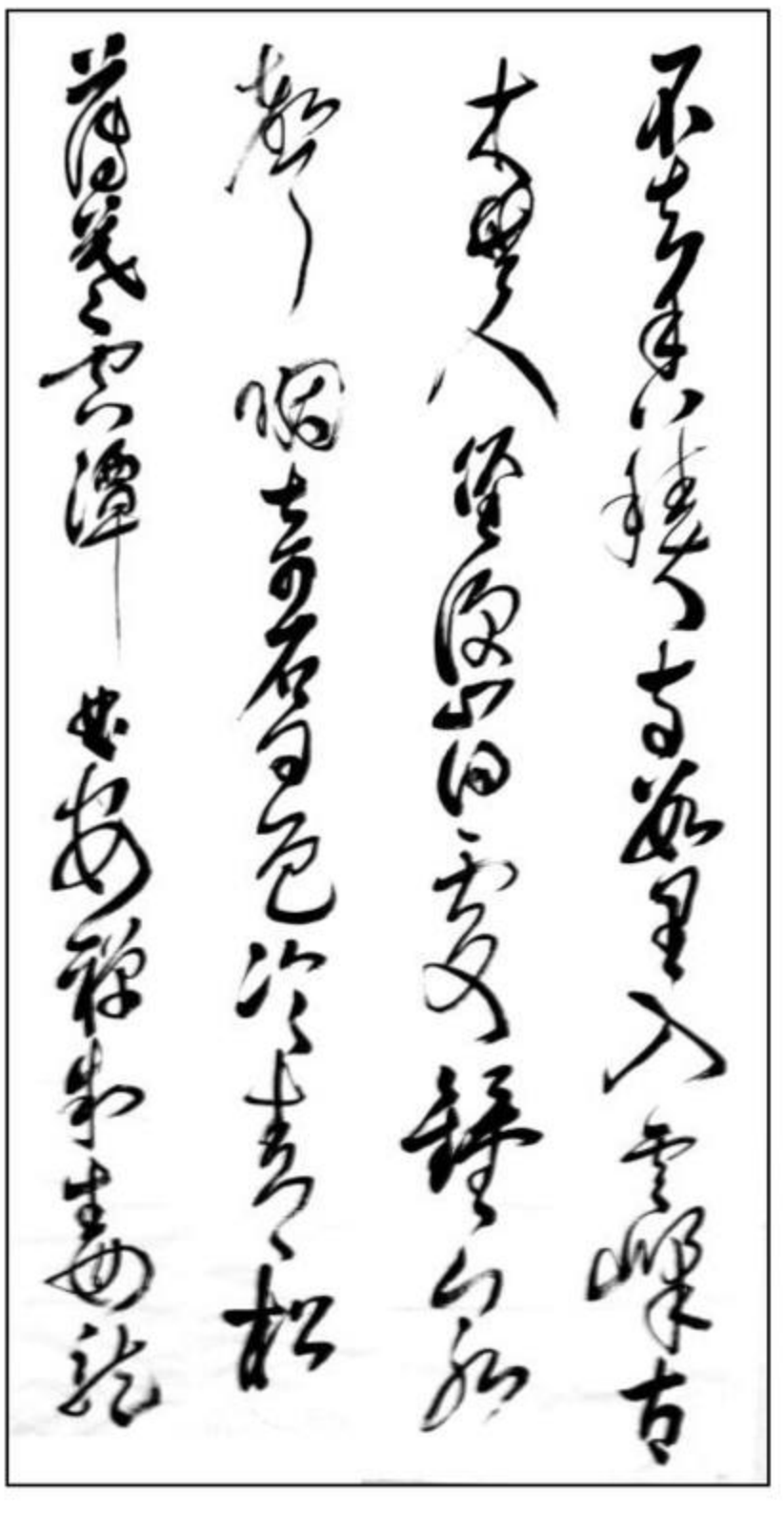
谷川俊太郎の好きな詩を題材にしました。「我々はどこから来たのか？」「我々は何者か？」人間誰しもが、最初は自身について何も知らないまっさらな状態で生まれてきます。そうした人間が抱く、人間のアイデンティティの所在と、その起源に対する問いかけ。その答えは、４６本の染色体を構成するＤＮＡの塩基配列として、太古の時代から細胞に記憶されていたのです。細胞の記憶が、〝ヒト〟としてだけではなく、〝人〟としての私たちの在り方も司っている――この詩と初めて出会った時、深い感動を覚えました。



四十七、鈴木新人　四回生
創作　草書　『過香積寺』　全紙

「不知香積寺　數里入雲峰　古木無人徑　深山何處鐘　泉聲咽奇石　日色冷青松　薄暮空潭曲　安禪制毒龍」

王鐸が王羲之・王献之を臨書したらというテーマで創作をしてみました。やらかく、そして切れ味のある線が持ち味だと思っていますが、王鐸さんになりきるにはまだまだのようです。行の揺れなども出しては見ましたが、結果はいかに…



四十八、辰巳鴻介　二回生

臨書　楷書　欧陽通『道因法師碑』　全紙

「此寺往經廢毀院宇凋弊法師慨然構懐專事…」

とんがっている起筆、突き出る縦画、中学生の自分を見ているようです。



四十九、多門千早　三回生

創作　調和体　『おもいでのうた』　15cm×15cm×2

「smile again どんなあなたもみんな好きだから」（『smile again』）

「たとえば君が傷ついて くじけそうになったときは かならずぼくがそばにいて ささえてあげるよ その肩を」（『ビリーブ』）

「僕の見る空と 君の見る空は つながっているから おんなじ空だから」（『きみとぼくのララ』）

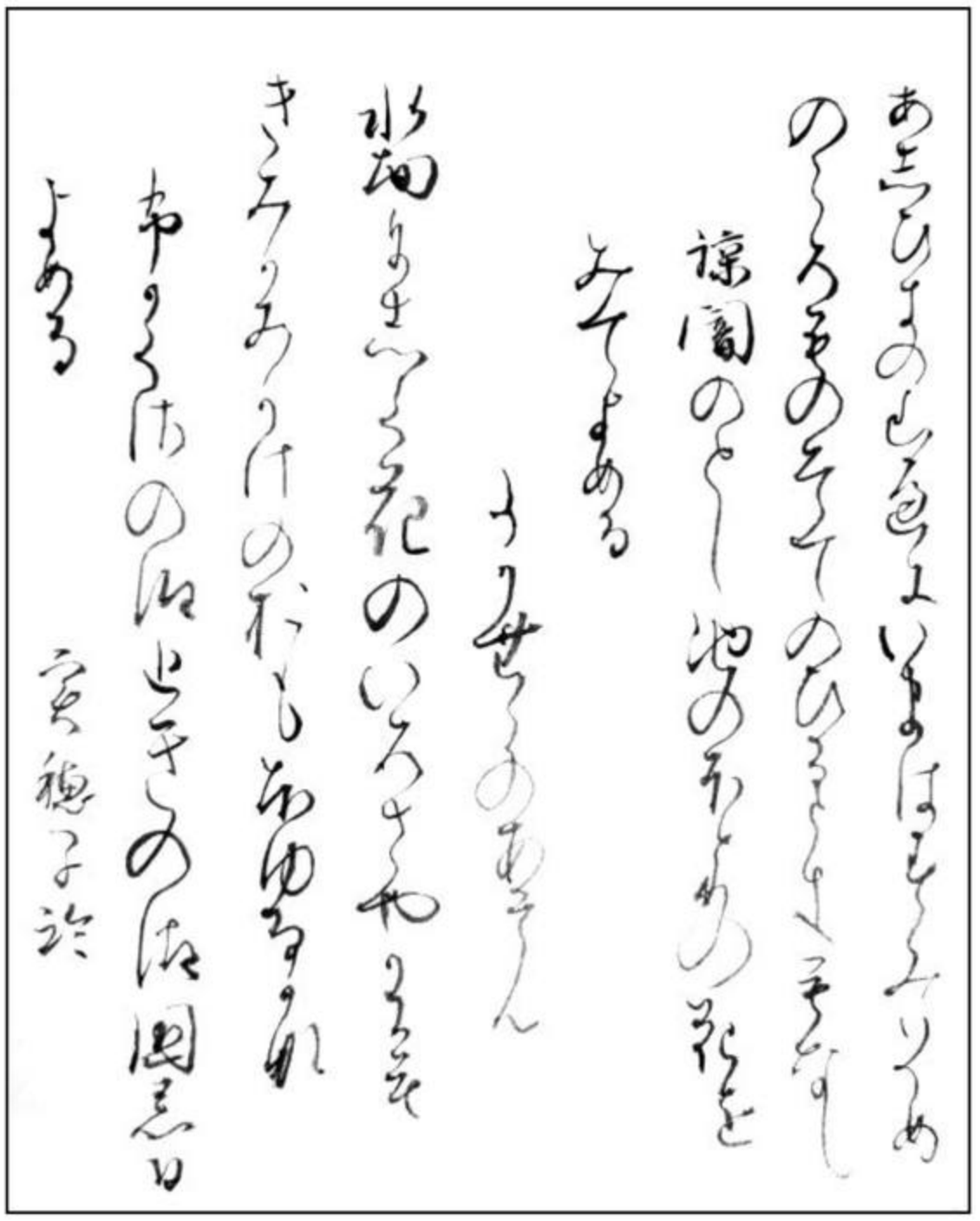
音楽の授業でどれも一度は歌ったことがあるような、そんな思い出の合唱曲の歌詞を書いてみました。合唱の歌詞はまっすぐで、素直で、心に直接すーっと入ってくるような気持ちのいいものです。大人になるにつれてうっかり忘れてしまいそうな純粋なことばたちを、みなさん思い出してみませんか。



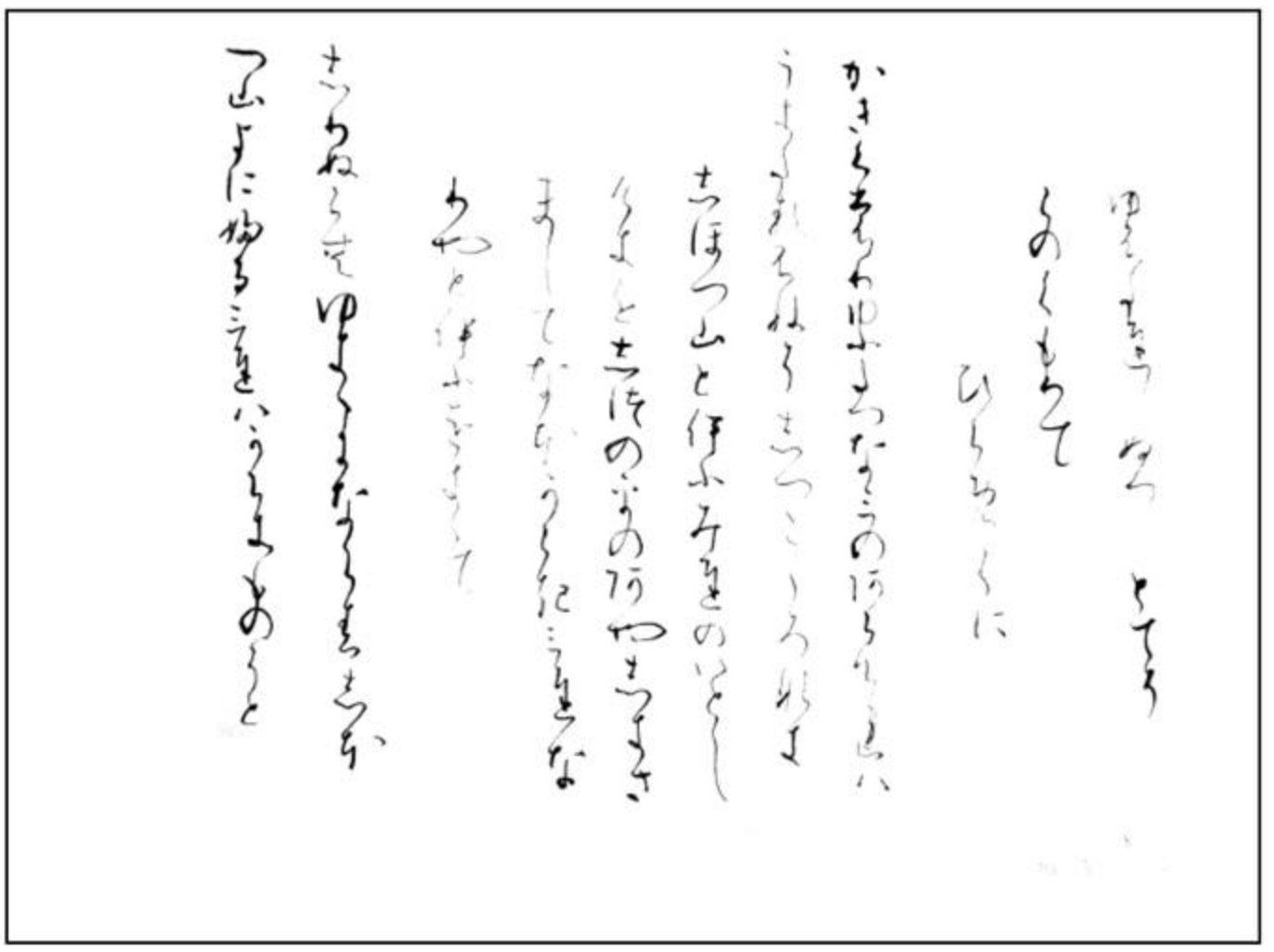




五十、寺田実穂子　三回生
臨書　かな　『関戸本古今集』　20.8cm×16.7cm
「あ志ひきの山べにいまはすみそめ／のころものそでのひるときもなし／諒闇のとし池のほとりの花を／みてよめる／たかむらのあそん／水面に志く花のいろさやかにも／きみのみかげのおもほゆるかな／ふかくさの御ときの御国忌日／よめる」
初めてかなを書きました。作品を見て、心の中で詠んでもらえたらうれしいです。



五十一、中田真規　三回生
臨書　かな　深山龍洞『紫式部集抄』　半懐紙
「夕立しぬべしと　空の曇りて　ひらめくに
かきくもり　夕立つ浪の　荒ければ　浮きたる舟ぞ　静心なき
塩津山といふ道のいとしげきを、賤の男のあやしきさまどもして『なほからき道なや』といふを聞きて、
知りぬらむ　往来にならす塩津山　世に経る道は　からきものぞと」
前回の秋季と同じ書家の作品を用いて臨書しました。行のゆれ・軸とみずみずしさを保つことが難しかったです。書展当日は参加できなくなってしまいましたが、アンケート等でコメントを頂けると幸いです。宜しくお願い致します。



五十二、中谷百花・天野直紀（美術部）　二・三回生
創作　『悠』　色紙三枚
「悠」
書とアートを融合させてみました。
楽しんでいただけると幸いです。



五十三、中野綾香　二回生
臨書　楷書　欧陽詢『九成宮醴泉銘』　半切
「皇帝爰在弱冠。經營四方。逮乎立年。撫臨億兆。始以武功壹海内。終以文」

一目見て美しいと感じるような完璧な楷書を、多少なりとも自分のものにしたいと思い、『九成宮醴泉銘』を臨書しました。書く前より書道の技術が少しだけ上達していれば、それで満足といったところでしょうか。



五十四、永溝聡士　修士一回生
臨書　楷書　呉熙載『楷書東方朔画賛四屏』　半切四連
「大夫……」
院生になっても書道に時間がかけられるのは幸せなことです。



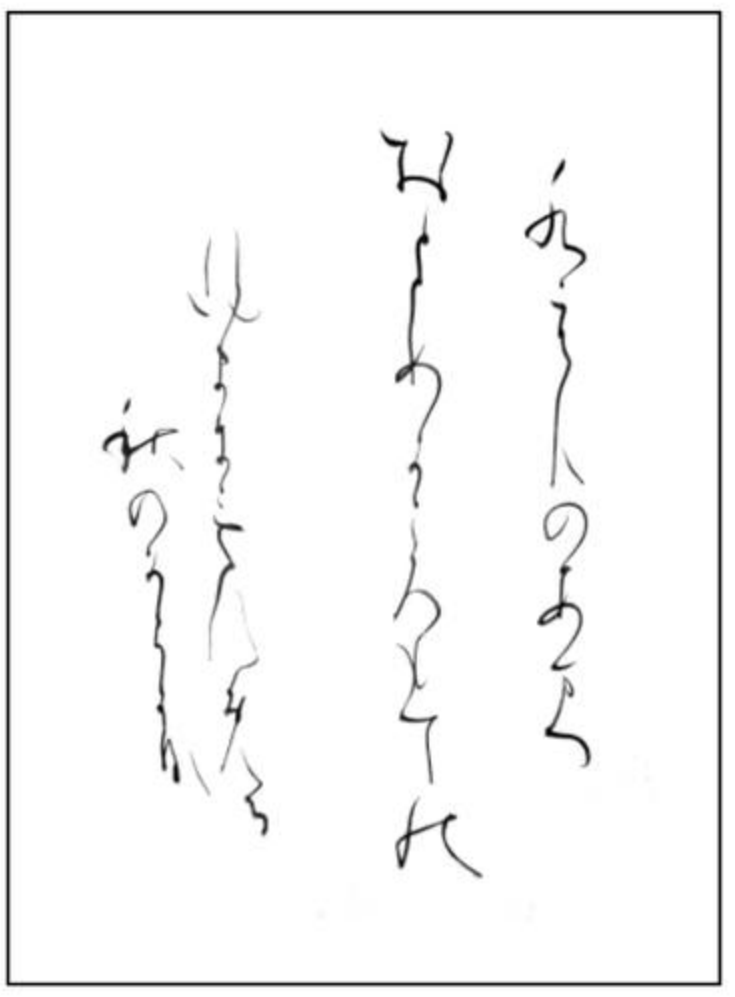
五十五、仁位元信　四回生
臨書　行書　董其昌『邠風図詩巻』　半切
「玉書金簡不足異布帛菽粟眞文」
以前から書いてみたいと思っていた董其昌の邠風図詩巻を半切の作品にしました。文字と余白のバランスが美しくなるよう注意しましたが、なかなか思うようにはいかず…。日々練習あるのみです。

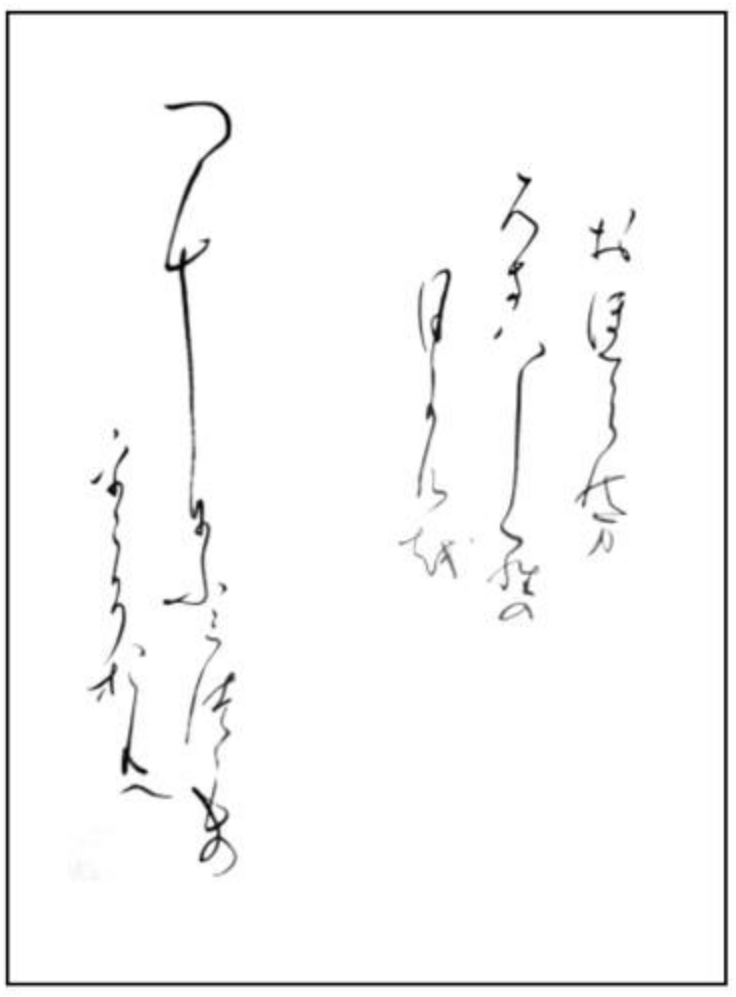


五十六、橋詰奈央・吉田梨沙
創作　かな　『奈良 随想』　40cm×35cm×2
「水えんのあ万(ま)つおとめ可(か)ころもて能(の)非(ひ)万(ま)尓(に)毛(も)須(す)免(め)る秋のそら可(か)那(な)」
「おほてら能(の)万(ま)ろ支(き)八(は)し羅(ら)の月可(か)介(け)越(を)つ千(ち)尓(に)ふ三(み)徒(つ)ゝもの乎(を)こそ於(お)乏(も)へ」

水煙の天つ乙女が衣出の暇にも澄める秋の空かな
大寺のまろき柱の月影を土に踏みつつものをこそ思へ

奈良を愛した明治生まれの歌人、会津八一が薬師寺と唐招提寺について詠んだ歌を一首ずつ書きました。創作に悩みつつも、二人で錬成会をすることで、お互いの表現の幅が広がった気がします。また奈良に行きたいね。







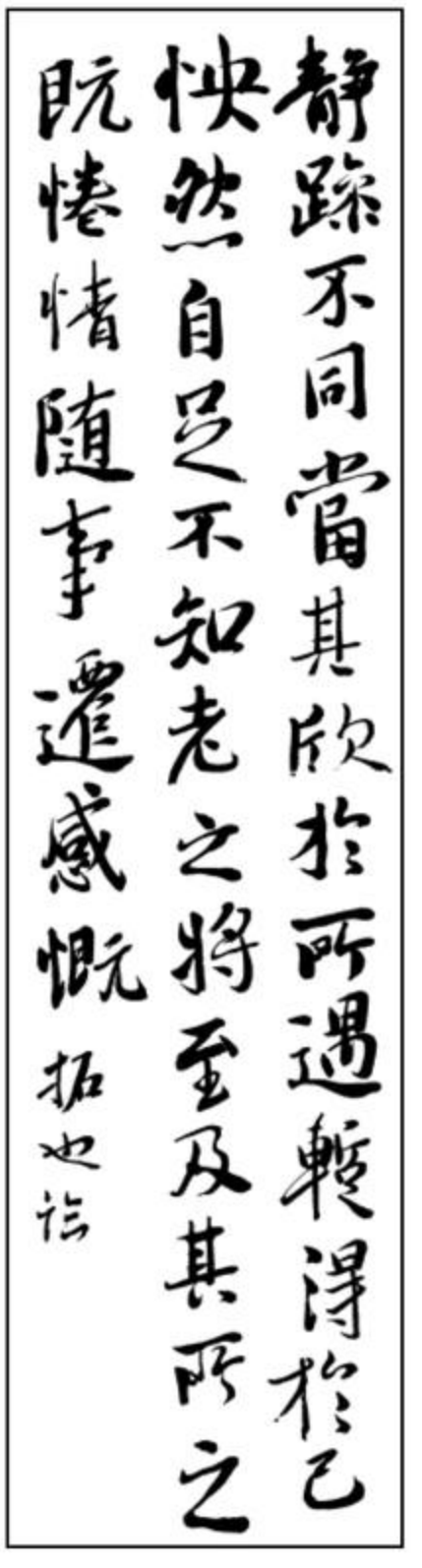
五十七、東村智佳　二回生
創作　行書　『初手天元』　聯落横
「初手天元」
　これは囲碁の布石の名です。天元とは碁盤の中心点のこと。隅から石を打ち始めるというセオリーに反したこの手を初めて用いたのが、「天地明察」で有名な渋川春海（二代目安井算哲）です。決して天才ではないが、様々なことに興味をもち、優れた洞察力とたゆまない努力によって、多方面で優れた業績を残した彼のような生き方をしたい、という願いを込めて。

五十八、檜山葵　三回生
臨書　かな　伝小野道風『継色紙』　半切二分の一
「あしひきの　山した水の　こがくれて……」
　継色紙の優美さと見事な構成美にひかれて選びました。未熟な作品ですが、みなさんにも継色紙の魅力を感じていただけたら嬉しいです。

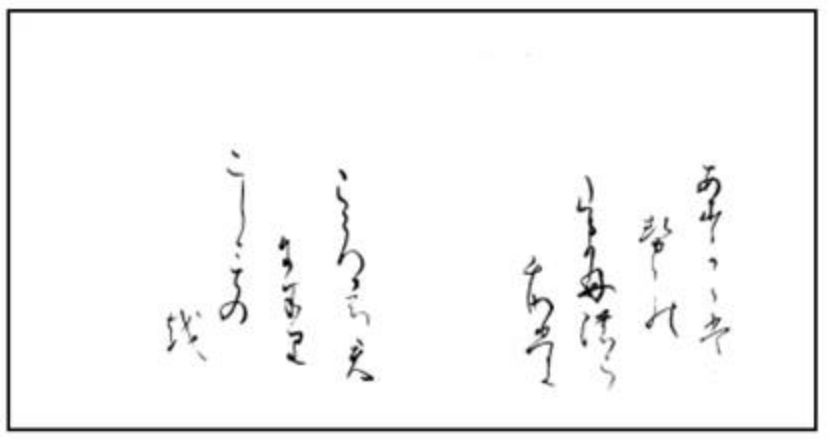
五十九、平野泰隆　三回生
臨書　行書　藤原行成『白樂天詩巻』　半切
「白雪吟時鈴閣開故情新興兩俳」
　前回の書展でも臨書した『白樂天詩巻』を再び臨書しました。ゆったりとして、穏やかな雰囲気が好きで、特に「新」の優雅な感じを表現できていれば幸いです。ご批評のほどよろしくお願いします。

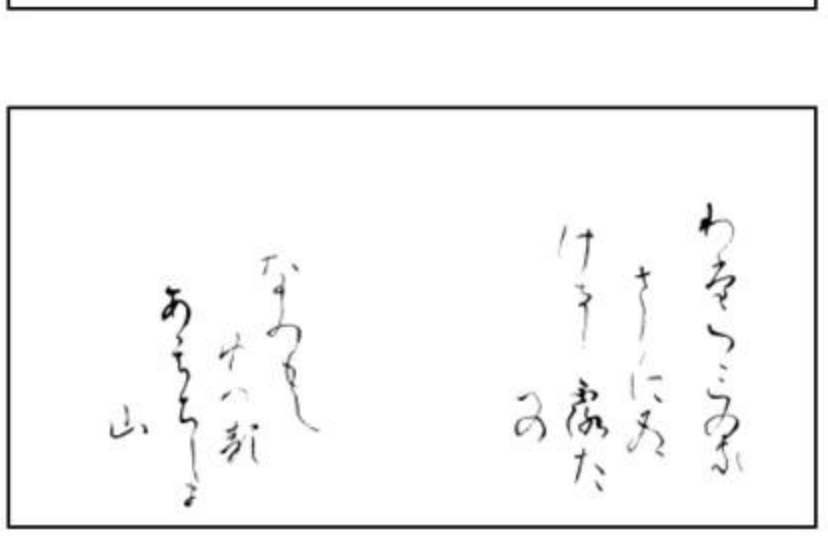


六十、宮下拓也　二回生
臨書　行書　王羲之『蘭亭序』　半切
「静躁不同當其欣於所遇暫得於己快然自足不知老之將至及其所之既倦情随事遷感慨」
まだまだ練習が足りませんが、昨秋よりは成長できたのでしょうか。
字の意味を大切にしたいと思う今日この頃です。



六十一、家倉凌　二回生
臨書　かな　小野道風『継色紙』　色紙
「あすかがは　せぜのたまもの　うちなびき　こころは君に　よりにしものを
はなのいろは　ゆきにまがひて　みえずとも　かをだににほへ　ひとのしるべく
わだつみの　かざしにさける　しろたへの　なみもてゆへる　あはぢしま山」
かなは全くの初心者で、墨の摺り方から教えていただいて書き上げました。





六十二、山本大翔　三回生
臨書　行書　聖武天皇『雑集』　半切
「縷風飄織成」
今回は多字数作品が多かったので、少数字作品にしてみました。少数字は難しいですね(泣)。



六十三、山本大翔　三回生
創作　調和体　『春になったら』　色紙
「春になったら遊びに行こうなんて・・・」
自己満足作品です。書道というよりアートって感じです。



六十四、吉田梨沙　三回生
創作　草書　『透』　半切四分の一
右下から左上に向かう作品を書いてみたくて、その構成に合いそうな漢字一文字をなんとなく選びました。



六十五、脇本啓太　四回生
創作　前衛書　『勝』　全紙
この作品を会場で目の前にした時、あなたが感じたままがすべてです。



六十六、渡辺健介　三回生
創作　調和体　『水滴石穿～イチローの言葉～』　全紙
「小さいことを積み重ねるのがとんでもないところへ行くただ一つの道」

「水滴石穿」は、辞書によると「わずかな水滴でも長く続けば石にも穴をあける」から転じて、「なにごともあきらめずに根気よく努力すれば、必ず成し遂げられる」の意。その横には、幼いころから努力を積んできたイチローさんの言葉を添えてみました。やる気のないときの自分を奮い立たせてやろう、そんな自分に向けての作品です。



◆合作

六十七、　新入部員小作品

新しく書道部に仲間入りをした部員たちが思い思いに個性あふれる小作品を書き上げました。これからの書道部での活躍にご期待ください。

六十八、　二回生合作

文字で風景を象形してみた作品。「絵画」と「書」という境界が曖昧な二者を交えることで、反ってその線引きを浮き立たせようとした思惑があるとかないとか。

六十九、　三回生合作　『大志を抱け！』

一年間幹部として共に頑張ってきた私たち三回生。過去を振り返りつつ新たな一歩を踏み出すため、小さい頃の夢と今の夢を互いに書きあいました。あなたの夢はなんですか。

七十、　四回生有志合作　『峠の茶屋』　漢字×かな×和空間

合作最高峰の作品を作りたい！久しぶりに会った奴らと話していたある日、ふとそんな思いが頭に浮かびました。そして〝最高の合作〟とは、個々の作品がただ寄り合っているのではなく、一つの合わさっている作品であるという指針の下で、その高みに少しでも近づけようと試行錯誤を繰り返してきました。工作をしたり仮名を練習したりと合作を作り上げて行く中で、同回生には多大なる負担を強いてしまい申し訳なさの極みであったと同時に、ここまで一緒にやってくれたことに感謝の念が尽きません。会場にいらした方は一度〝墨よりだんご〟の世界を楽しまれてはいかがでしょうか？

七十一、　全体合作　『好きな言葉』

誰しも心に残る素敵な言葉に出会ったことがあるはず。そんな言葉を部員それぞれが思いを込めて表現しました。京大書道部部員の溢れる個性を作品、プロフィール共々お楽しみください。



This book was
made by the LeME